

運動の魅力を探求していく生徒を育む武道の学習指導

一剣道における思考のプロセスを振り返る学習展開の工夫を通してー

久留米市立北野中学校 須田新之介

I 主題設定の理由

1 現代社会の要請や教育の動向から

現在の日本における教育をめぐる現状と課題から、約60年ぶりに改正された教育基本法では、公共の精神など社会全体において低下している規範意識を大切にしていくことや、それを醸成してきた伝統と文化を尊重すること、生命や自然を尊重する態度などの理念が新たに明確にされた。そして、中央教育審議会答申(H20.1文部科学省)では、体育・保健体育科の改善の基本方針について、「武道については、その学習を通じて我が国固有の伝統と文化に、より一層触れることができるよう指導の在り方を改善する。」と示された。これらを受け、平成24年度より完全実施となった中学校学習指導要領により、第1学年及び第2学年において武道領域が男女共に必修となり、相手を尊重する気持ち、自分で自分を律する克己心を表すものとして礼儀などの伝統的な考え方や行い方を身に付けることが態度や知識、思考・判断の目標として定められた。つまり、武道の領域を通して、すべての生徒が我が国固有の文化を体験し、礼法に代表される伝統的な考え方や行動の仕方を身に付け、これから益々加速していく国際化の社会の中で日本人としての自覚と誇りをもって逞しく生きていく生徒を育成することが求められている。また、子どもたちの心の現状について、文部科学白書(H20.4文部科学省)では、「自尊感情の乏しさ、自制心や規範意識の低下、人間関係を形成する力の低下など、子どもの心の活力が低下している。」と述べている。さらに、中央教育審議会答申(H20.1)では、体育科・保健体育科の課題として、運動する子どもとそうでない子どもの二極化、子どもの体力低下傾向が深刻であること、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力が十分に図られていないこと等が課題としてあげられた。これらの課題の改善に向けて、学校体育における役割と責任は重大であり、豊かな心を育むことを目指す道徳教育をはじめ、すべての教科で取り組んでいく課題であるが、心と体を一体としてとらえるという観点から、保健体育科としてはもちろん、特に、武道領域においては、その特性から担うべき役割は大きいと言える。そこで、確かな学力や豊かな心、健やかな体といった知・徳・体のバランスのとれた生きる力を育むことを目指す我が国の教育において、運動の魅力を探求していく生徒を育む本研究に取り組むことは、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるという保健体育科の目標からも意義深いことである。

2 中学校学習指導要領における武道の教育的価値から

今回の学習指導要領改訂の基本方針において、学習したことを実生活、実社会において生かすことを重視し、小・中・高等学校を通じ、指導内容を整理し明確化することで体系化が図られた。小学校から高等学校までの12年間で4年ずつの3段階に分け、各種の運動の基礎を培う時期[前期]、多くの領域の学習を経験する時期[中期]、少なくとも1つの運動やスポーツを継続することができるようになる時期[後期]というカリキュラム構想が立てられている。[中期]である中学1・2年という時期は、心身の発達も著しく、運動に対する関心や意欲が高まり、その特性を楽しんだり、技能向上を目指そうとする意欲を高めたりする時期である。その時期に武道・ダンスを含む、すべての運動領域の経験をさせ、基礎・基本をしっかりと習得させることは、[後期]において運動を選択し、発展的な学習につなげていくためにも大切なことである。また、武道においては、相手と直接

的に攻防するという特徴や、中学校で初めて経験する運動種目であることなどから、効果的、継続的な学習ができるようにすることが必要であるとともに、段階的な指導を必要とするため、特定の種目を3年間履修できるようにすることが望ましいとも触れられている

また、武道は、武技、武術などから発生した我が国固有の文化であり、相手の動きに応じて、基本動作や基本となる技を身に付け、相手を攻撃したり相手の技を防御したりすることによって、勝敗を競い合う楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。さらに、武道の学習に積極的に取り組むことを通して、武道の伝統的な考え方を理解し、相手を尊重して練習や試合ができるようにすることをねらいとしている。

その中でも剣道は、竹刀を使って相対し、基本となる技や得意技を用いて、相手との攻防を展開しながら「有効打突」を競い合う運動である。竹刀を用いて互いに打ったり、打たれたりという行為は剣道でしかできない体験であり、大きな特性であると言える。また、有効打突（一本）の条件の1つである大きな声を発する行為（氣勢）や相手の目を見て心を読み、次の動きを瞬時に判断すること等も大きな魅力である。さらに、理にかなった技の合理的な動きには美しさを兼ね備えている。そして、単に試合の勝敗を目指すのではなく、「礼に始まり礼に終わる」といった気持ちを大切に、相手との激しい攻防の後でも、相手の立場を考え、最後まで礼を尽くす態度である克己心などを理解し、身に付けさせることが剣道には求められている。

以上のことから、武道の学習を通して、伝統的な行動の仕方、考え方や相手との攻防等を学習する中で運動が有する楽しさや喜びを実感するとともに、「道」（人としての生き方、在り方）を学んでいくことは、意義深いと言える。

3 生徒の実態とこれまでの指導の反省から

本校では、武道領域において柔道を実施してきた。その理由として、用具や場所等の条件整備が整っていることや、柔道を専門とする体育教師がいたこと等があげられる。そこで、本年度より武道必修化に伴い、防具や用具等の条件が整備されたことを踏まえ、より多くの種目を体験させていきたいと考え、剣道も取り組んでいくこととした。

そこで、生徒の実態を調査するため、本年7月、保健体育の学習についての調査（第1学年2組、男子19名、女子16名、計35名）を行った。その結果を見ると、「体育の授業でどんなときにうれしいと感じたり、楽しいと感じたりするか」という問いに対して、「できなかった事ができるようになった時」と回答した生徒が62%（複数回答可）であった。このことから、生徒が達成感を感じることに体育の授業における楽しさや喜びを感じていると言える。

次に、「武道について興味をもったことがあるか」という問いに対しては、「はい」と回答した生徒が41%、「いいえ」と答えた生徒が59%であった。また、「武道の授業で、何の種目を学習したいか」という問いに対しては、「剣道」と回答した生徒が82%という高い数値を示した。その中で、「剣道を学習していく上で不安なことは何か」という問いに対して、「難しそう」「できるかどうか不安」と回答した生徒が42%（複数回答可）、「痛そう」「怪我をしそう」と回答した生徒が31%（複数回答可）であった。これらのことから、武道領域の中でも、剣道への興味・関心は高いが、初めて経験する領域であるため、安全面に対する不安や、できるようになれるのかといった技能面に不安を抱いている生徒がいることがわかった。

そして、私自身のこれまでの指導法を振り返ってみると、生徒が楽しいと感じる授業を最優先に考えてきた。生徒たちも授業に積極的に取り組んでいたが、それは果たして保健体育科の学習で感じる本当の楽しさだったのかと考える。生徒任せにし、動いて、汗をかく、笑顔が多ければそれでよいといった授業であったように考える。また、グループノートや学習カードを使い、自己やチームの課題は振り返らせるが、課題をより明確にし、その課題克服に向けた手立てを十分にとることにまで至っておらず、その運動の有する特性に触れ、わ

かったり、できるようになったりすることを実感する中での楽しさや喜びを感じさせるものではなかったように考える。

これらの反省を踏まえ、中学校で初めて出会う武道領域において、これまで経験したことのない剣道を通して、伝統的な考え方や文化に出会い、仲間と協力しながら、剣道の技がもつ本来の美しさやその醍醐味、伝統的な行動の仕方の価値といった武道の魅力を感じ、考え、理解し、実践していく生徒を目指す本研究は、意義深いことだと考え、本主題・副主題を設定した。

II 主題・副主題の意味

1 主題「運動の魅力を探求していく生徒を育む武道の学習指導」とは

(1) 「運動の魅力」とは

魅力とは、「人を引き付ける力」（旺文社国語辞典）である。運動が生徒を引き付ける力とは、その運動のもつ特性に触れる中で感じるものであると考える。運動の特性とは、学校体育授業辞典（H7, 7字土）によると、「各運動に固有の性質や特徴のこと」「各運動に固有の個々の学習者にとっての本質的な意味や価値」とある。運動の本質的な意味や価値とは、運動を通して「もっと運動したい（欲求）」「運動が自分にとってためになる（必要）」「運動することで満足できる（充足）」と感じさせる働きのことであり、これらを機能させるためには、生徒が楽しさや喜びを感じる事が大切となる。

運動の楽しさや喜びには、他者に挑戦し、勝敗を競い合うこと（競争）、記録やフォームなどの定められた基準に挑戦していくこと（達成）、自然や障害物に挑戦すること（克服）、模倣や変身すること（表現）が含まれるが、これらは各運動に複数存在し、発展的に変化したりするものであり、類型化されるものではない。岩田は、「ゲームで競い合う、動きができるようになる、記録を向上させる、何かになりきって動くというのは実のところ、『運動の課題の創られ方の違い』を意味している。そうだとすれば、運動の楽しさとはつまるところ課題に応じて何かができるようになることを基底にしていると理解できる。」（H24, 2「体育の教材を創る」）と述べている。

以上のことから、運動の魅力とは、「特性に触れることを通して、それぞれの運動がもつ運動の課題がわかったり、できたりしたときに感じる楽しさや喜びである。」と考えた。

このことから、武道領域の魅力とは、武技・武術から発生した我が国固有の文化に触れ、相手と直接的に攻防することを通して、基本動作から基本となる技ができ、その技を用いて、相手の動きの変化に対応した攻防により勝敗を競い合うことで感じる楽しさや喜びであるととらえる。

(2) 「運動の魅力を探求していく」とは

探究するとは、「物事の真の姿を探って、見極めること」（広辞苑）である。つまり、物事の真の姿とは、運動の特性であり、運動の特性に触れて運動の課題がわかったり、できたりするようになる魅力を感じた生徒が、技能の習得を通して、ルールやマナーを守り、協力して学習するなどの人とかかわるよさにも気付くことで、その運動に更なる価値を感じ、「もっとやってみよう。」「もっとできるようになりたい。」という愛好的態度を持ち続けて、運動とかかわろうとすることである。

同様に武道領域において考えると、我が国固有の文化であることや相手と直接的に攻防するという特性に触れ、基本動作や基本となる技ができるようになることや、その技を用いた攻防の仕方がわかり、できることに楽しさや喜びを感じた生徒が、その特性から、技が決まるだけでなく、自らの立ち居振る舞いが判定に含まれるなど、礼法・所作・作法といった相手を尊重する態度、伝統的な行動の仕方、それらの礎となる伝統的な考え方に武道の価値を感じ、更に武道に愛好的態度を持ち続け、かかわろうとすることである。

(3)「運動の魅力を探究していく生徒」とは

運動の特性に触れ、運動の課題がわかったり、できたりするようになる楽しさや喜びを感じることを通して、その運動のもつ新たな価値に気づき、運動に対して愛好的態度を持ち続け、かかわろうとする生徒のことである。

そこで、本研究が剣道の学習において、具体的に目指す生徒の姿を以下の【表1】に示す。

【表1】

資質や能力	目指す生徒の姿
技能	相手の動きに応じた基本動作や基本となる技を習得し、それを生かして打ったり、受けたりする攻防ができる生徒。
態度	伝統的な行動の仕方を守ろうとするとともに、課題を把握し、その解決に向けて、仲間と協力しながら積極的に武道の学習に取り組んでいく生徒。
知識 思考・判断	武道の特性や成り立ち、技の名称や行い方、伝統的な考え方・行動の仕方の意味・理由を理解し、課題に応じて取り組み方を工夫するとともに、技能と態度を関連付けて考えることができる生徒。

2 副主題「剣道における思考のプロセスを振り返る学習展開の工夫」とは

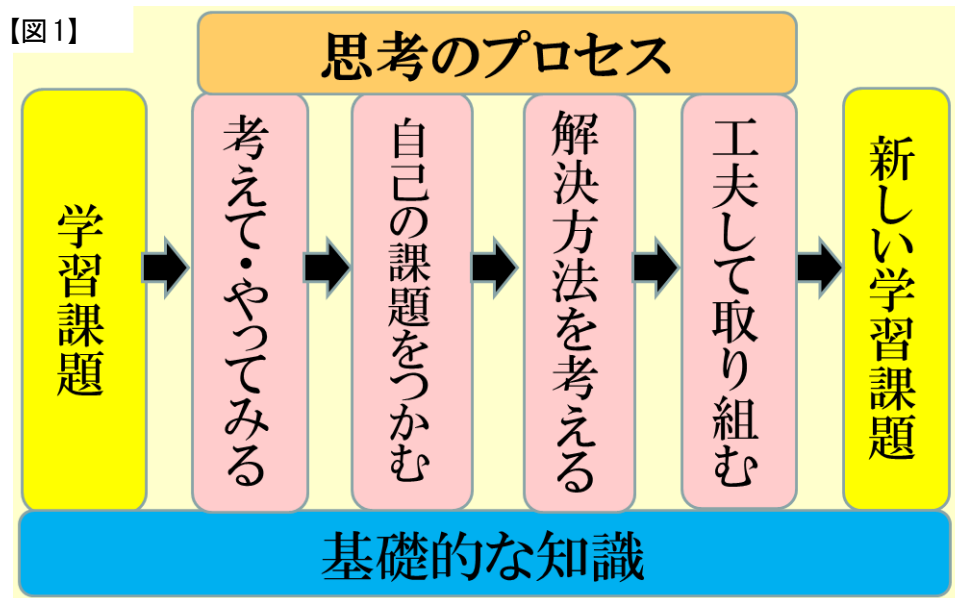
(1)「思考」とは

現代教育方法辞典（H16.10）によると、「思考力とはより正確に言えば論理的な思考力であり、それは問題解決場面で既存の知識と解決された状態との間に論理的な道筋をつけることのできる力である。」と述べられている。保健体育科の学習においては、基礎的な知識と技能の習得を基に、それを活用し、思考力、判断力、表現力を育成していくことが求められている。そして、中学校学習指導要領各領域に共通した思考・判断の指導内容では、第1学年及び第2学年において、「課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。」とされている。武道領域における第1学年及び第2学年の例示として示されているのは、技能における思考・判断として「技を身に付けるための運動の行い方のポイントを見付けること」や、「課題に応じた練習法を選ぶこと」である。態度における思考・判断として「仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた協力の仕方を見付けること」や、「学習した安全上の留意点を他の練習場面に当てはめること」があげられている。すなわち、体育の学習における思考とは、運動課題の達成に向けて、個人の課題や仲間の課題に気づき、その課題の解決に向けて練習を工夫したり、学習を振り返ったりする活動において、筋道を立て考えていくことである。

(2)「思考のプロセス」とは

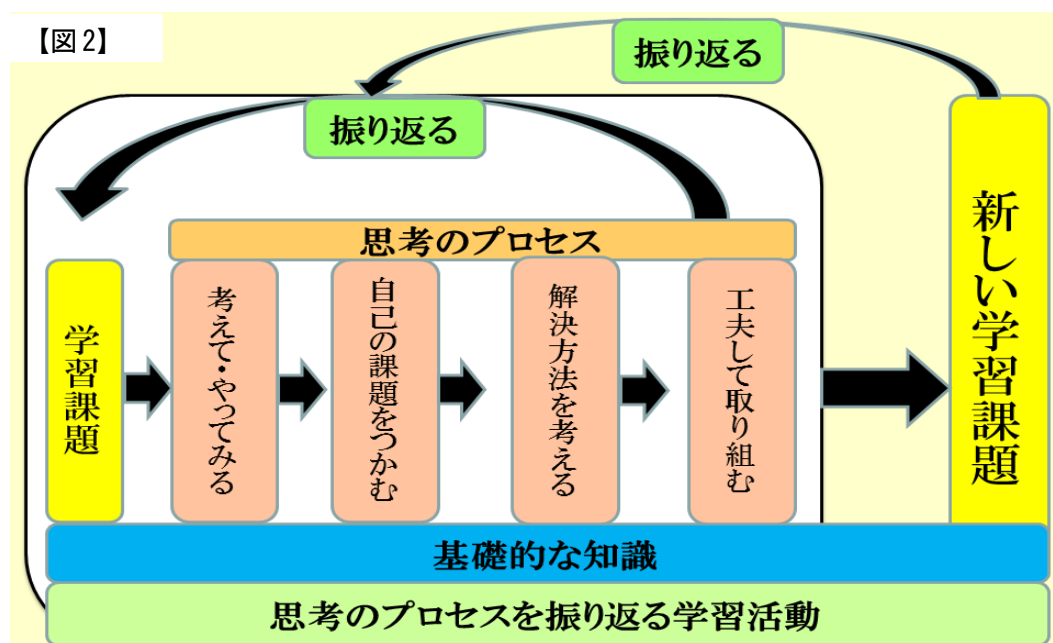
プロセスとは「過程」のことであり、広辞苑には、「経過した道筋、物事の進行、発展の経路」とある。体育の学習における思考のプロセスとは、生徒が自己の現状をとらえ、目標とする姿に近付いていくために、学習課題や自己の課題を解決していく中で、何を、どのようにしていったらいいのかを考え、工夫しながら取り組んでいく過程のことである。初めて剣道を経験する第1学年を対象とした本研究においては、習得した基礎的な技能や知識をもとに、より技能を高めていくことや態度を身に付けるために、自己の課題として何に着眼し、どのように変えていけばいいのかを考え、工夫しながら取り組んでいった過程【図1】のことである。つまり、技能においては、技ができるようになるために、仲間からのアドバイスや学習カードなどを参

考に、自己の現状を把握し、どこを直していくべきなのかといった課題に気付き、その解決に向けて考えたことを、工夫しながら練習に取り組んでいく過程のことである。また、態度においては、武道における伝統的な考え方を理解し、行動の仕方を守ることがなぜ大切なのかを考えながら練習に取り組んでいくことである。その中で、武道の価値を振り返りながら学習に取り組んでいく過程のことである。



(3) 「剣道における思考のプロセスを振り返る学習展開の工夫」とは

剣道の学習において、単元を3段階で構成し、相手の動きに応じた基本動作や基本となる技といった技能や伝統的な行動の仕方といった態度を身に付けるために、課題として何に注目し、筋道立てて考え、工夫しながら取り組んでいった過程を振り返るような学習活動を段階のねらいに応じて設定していくことである。【図2】



Ⅲ 研究の目標

剣道における思考のプロセスを振り返る学習展開の工夫を通して、運動の魅力を探究していく生徒を育む武道の学習指導の在り方を究明する。

Ⅳ 研究の仮説

剣道の学習において、「出会う」、「つかむ」、「振り返る」の段階的な学習指導過程を仕組み、段階に応じて以下のような思考のプロセスを振り返る学習活動に取り組めば、運動の魅力を探究していく生徒を育むことができるであろう。

1 段階的な学習指導過程の工夫

「出会う」段階 → 「つかむ」段階 → 「振り返る」段階を設定する。

2 剣道における思考のプロセスを振り返る学習活動

(1) 剣道の動きに類似した運動

(2) 基本打突の出来映え判定試合（班内）、基本となる技の出来映え判定試合（ペア対抗）

(3) 自由練習

3 支援教材の工夫

「学習カード」「個人技能チェックシート」「出来映え判定試合相互評価シート」「映像資料」

Ⅴ 研究の具体的構想

1 段階的な学習指導過程の工夫

杉山ら(H21, 11 保健体育科教育法)によると、段階的な指導とは「最初から目標とする課題そのものを練習するのではなく、簡単な課題を重ねたり徐々に難度を上げたりして指導すること。安全の確保や効果的な技能の習得のために、有効であるとされる。武道で有効な段階的な指導の要点は『易から難』『遅から速』『弱から強』『単独から相対』『その場から移動』及び『基本から応用』などである。」と述べている。つまり、生徒が技能を習得していく上で達成可能な技能を徐々に設定していくことや、2年ごとに示されている取り扱い技能の内容を精選し、系統性を明らかにしながら、さらに、発達の段階を十分に考慮し、指導していくことで、生徒にとって無理なく意欲的に取り組んでいけるものとする。

そこで本研究においては、「出会う段階」、「つかむ段階」、「振り返る段階」の3つの段階【表2】を設定する。

「出会う段階」とは、剣道の魅力に出会う段階であり、「やってみよう」「できそうだな」と思わせるようなオリエンテーションや導入段階における工夫を行っていく。また、基本動作（中段の構え、体さばき、竹刀への打突）や作法、所作を学習する過程においては、相手の動きに応じた対人的技能として行うことで、相手とのかかわりによって剣道が成立する運動であることにも出会わせていく段階のことである。

「つかむ段階」とは、剣道の魅力を感じる段階であり、対人的技能を中心とした基本動作（基本打突）の習得において、自らの課題を把握し、その解決に向けて意識して取り組ませていく。また、直接的に相手と攻防することを初めて経験することから、互いに協力して技をつくり合う中で、相手がいることの大切さを感じ、礼法などの伝統的な行動の仕方においても、より意識しながら取り組んでいくことができるようにする段階のことである。

「振り返る段階」とは、剣道の魅力を味わう段階とし、基本となる技の出来映え判定試合や自由練習の学習を行う中で把握した自己の課題に対し、これまで学習してきた基本動作や基本となる技を振り返り、生かしながら取り組む中で、更なる技能の高まりをねらう段階のことである。また、態度においても、これまで学習してきたことを基に、勝敗にかかわらず最後まで礼儀を尽くすことが相手を尊重することとなることに気付き、その結果、自己の態度の高まりを実感できることをねらう段階とする。

【表2】〈第1学年〉

段階	出会う段階		つかむ段階				振り返る段階			
ね ら い	剣道に初めて触れ、相手の動きに応じた基本動作や伝統的な行動の仕方の学習を通して、剣道の魅力に出会う。		相手の動きに応じた基本動作(基本打突)の学習を通して、「相手を尊重する気持ち」について考え、剣道の魅力を感じる。				これまでの学習を振り返り、生かしながら、技の出来映え判定試合や自由練習の学習を通して、勝敗を競い合ったり、自由に攻防をしたりする中で「克己心」について考え、剣道の魅力を味わう。			
時 間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
学 習 活 動	①オリエンテーション ・剣道の特性、歴史、作法、所作		正座・黙想・座礼・めあて確認・安全確認・着装							
	②基本動作 ・竹刀の握り方、扱い方 自然体、中段の構え 体さばき(歩み足、送り足)		①準備運動・素振り・対人での基本動作(体さばき・空間打突・竹刀への打突・発声)							
	③剣道の動きに類似した運動 ・新聞紙切り ・新聞紙ボール打ち ・ぞうきん足さばき		②基本打突の打ち方、受け方、打たせ方 ・正面 ・小手 ・胴 ※一斉指導		②班(ペア)で課題に応じた練習 ③基本打突の出来映え判定試合 ※班内 ○試合法、ルールの理解 ・正面 ・小手 ・胴		②班(ペア)で課題に応じた練習 ③基本となる技、しかけ技 引き技の打ち方、受け方 打たせ方 ※鑢ぜり合い ・引き胴 二段の技の打ち方 受け方、打たせ方 ・小手→面 ※一斉指導 ④約束練習 ・正面打ち→ 鑢ぜり合い 引き胴→小手、面 ⑤自由練習		②班(ペア)で課題に応じた練習 ③基本となる技の出来映え判定試合 ○試合法、ルールの理解 ※班(ペア)対抗 ※班内で振り返り ④自由練習 ⑤学習のまとめ	
	④防具の着装、結束(面・胴・垂) ⑤対人での基本動作(空間打突、体さばき、発声)		③班(ペア)で課題に応じた練習 ※班内で相互評価							
	集合・整理運動・本時のまとめ、班・個人の振り返り・正座・黙想・座礼・片付け									
支援 教材	学習カード・個人技能チェックシート・出来映え判定試合相互評価シート・映像資料									
態 度	礼法、所作を守る(伝統的な行動の仕方)		相手と協力して技をつくり合う(相手を尊重する気持ち) 「思いやり、感謝、真剣、全力」				勝敗を素直に認め、最後まで礼儀を守る(自分で自分を律する克己の心)			
	公正、協力、健康・安全									
知 識	武道の特性や成り立ち、技の名称や行い方、伝統的な考え方(人間として望ましい自己形成を重視する)									

2 剣道における思考のプロセスを振り返る学習活動

(1) 剣道の動きに類似した運動

剣道は、竹刀を用いること、体さばきや構えなど運動形態が他の領域にないことや、声を発することが欠かせない運動であり、これまで経験したことのない動きや特性をもつ運動である。新しい運動に興味・関心をもって取り組む生徒がいる反面、その動きを「難しい」「声を出したりすることが恥ずかしい」「痛そう」などの理由で苦手意識を感じる生徒がいる。そのため、新聞紙切り、新聞紙ボール打ち、ぞうきん足さばきなどの剣道の動きに類似した運動を行い、痛みを伴わずに楽しく特性に触れる活動を通して、竹刀を真っ直ぐ振る動きや巧みな竹刀操作、体さばき、発声などを習得させていくとともに、その活動の中で自己の課題として把握させることをねらいとする。

また、班で役割を交代しながら協力して運動を行わせていくことによる態度の高まりもねらいとする。

(2) 基本打突の出来映え判定試合、基本となる技の出来映え判定試合

本研究においては、剣道を初めて経験する第1学年を対象とするため、相手の動きに応じた基本動作から基本となる技ができること、その技を用いて攻防ができることの楽しさや喜びを感じることを目標としている。そのことから、まず、構えのもととなる自然体や基本となる中段の構え、相手の動きに応じた体さばきなどを正しく習得させた後、基本打突である正面、小手、胴の打ち方、受け方や打たせ方、しかけ技などの基本となる技を身に付けていくことが必要である。そこで、これまで学習してきた技が正しく身に付いているかを確認、競い合うための場として設定するのが、試合形式を用いた基本打突、基本となる技の出来映え判定試合【表3】である。また、判定の基準として、有効打突の条件である「気・剣・体の一致、残心」について理解させ、意識し、工夫しながら学習に取り組むことや、試合の行い方や審判の仕方について習得させることもねらいとする。

【表3】

試合名	時間	課題となる技	試合の行い方
基本打突の 出来映え判定試合 I (班内)	5 時 間 目	正面、小手、胴の打ち方、受け方	同じ技を2回ずつ打ち、有効打突の条件である「気・剣・体、残心」の項目毎に達成度で（できていると思われた項目は審判が手を挙げる）判定をしていく。また、打つ側、打たせる側それぞれにおいて判定をしていく。 ※班内で組んでいるペアで行う。
基本打突の 出来映え判定試合 II (班内)	6 時 間 目		同じ技を2回ずつ打ち、有効打突の条件である「気・剣・体、残心」の項目を総合的に判断し、どちらがより条件を満たしていたか（より満たしていたと思われる方に審判は手を挙げる）を判定していく。打つ側のみの判定をしていく。 ※班内で技毎に相手を交代しながら行う。
基本となる技の 出来映え判定試合 (ペア対抗)	9 時 間 目	正面打ち→鰐ざり合い→引き胴	2班合同（8人～9人）、ペア対抗で行う。 それぞれのペアが1本ずつ技を打ち、4人が全て打ち終わった時点で有効打突の条件である「気・剣・体、残心」の項目を総合的に判断し、どちらのペアがより条件を満たしていたか（より満たしていたと思われるペアの方に審判は手を挙げる）を判定していく。※対戦ペアを交代しながら行う。

	10 時 間 目	小手一面	2班合同（8人～9人）、ペア対抗で行う。 それぞれのペアが1本ずつ技を打ち、4人が全て打ち終わった時点で有効打突の条件である「気・剣・体、残心」の項目を総合的に判断し、どちらのペアがより条件を満たしていたか（より満たしていたと思われるペアの方に審判は手を挙げる）を判定していく。 ※対戦ペアを交代しながら行う。
--	-------------------	------	---

有効打突とは、剣道における勝敗を決するためのポイントのことであり、全日本剣道連盟がその条件を定めているが、本研究では、剣道を初めて体験する第1学年の生徒が対象であることから、有効打突の条件を生徒の実態に合わせて【表4】のように設定することで、生徒にとってわかりやすいものとなり、剣道の楽しさや喜びをより感じることができると考える。

【表4】

全日本剣道連盟による有効打突の条件	北野中1年生 有効打突の条件
充実した氣勢	大きな声で打突部位の名称を発声
適正な姿勢をもって	正しい姿勢をもって
竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し	相手の打突部位を竹刀の打突部で打突し
残心あるものとする	相手に対して中段の構えをとる

そして、自分の技能上達には、相手の協力が必要不可欠であり、試合の相手を務めてくれる仲間への感謝の気持ちや相手を尊重する気持ち、勝敗が決した後も感情を態度に表すことなく最後まで礼儀を守るといった克己の心についても考えさせることにより、態度の高まりもねらいとする。

(3) 自由練習

これまでの学習を振り返り、生かしながら、相手と自由に攻防する楽しさや、その攻防の中で有効打突を打つ喜びを味わうことをねらいとする。本研究においては、剣道を初めて経験する第1学年を対象としており、打突の機会や相手の技をかわして打つといった応じ技などを十分に学習することができていないため、積極的に技を出し合うことを意識させながら行わせる。また、これまで同様、自己の課題を把握し、工夫しながら取り組ませるとともに、打突の機会を学ぶことや使える技を増やしていくことの必要性についても課題としてつかませていきたい。その中で、禁じ技を用いないこと、ルールを守るといった公正、安全における態度の高まりや、互いに全力を尽くして行う攻防の中でも、相手を務めてくれた仲間へ感謝するといった相手を尊重する気持ち、「打った」「打たれた」にかかわらず感情をおさえて礼儀を守るといった克己の心につなげていくことなどにおいてもねらいとする。

3 支援教材の工夫

(1) 学習カード

単元や各時間の学習課題・学習内容の見通しをもつとともに、自己の目標・課題を設定し、その達成や解決に向け、何を意識し、どんな工夫をしながら取り組んでいったのかといった思考のプロセスを整理するために使用する。

また、ペア、グループの仲間の課題解決のために、技や伝統的な行動の仕方のポイントについて、気付いた点の助言を記入していく欄を設ける。そのことにより、協力しながら技や態度を高めていけるとともに、自己の動きの課題が明確になり、更なる課題解決へとつながっていくことや、その考えた過程を振り返ることで、技能、態度の高まりや成果を実感し、次の学習への関心・意欲を向上させることをねらいとする。【図3】

【図3】

火) 5 曜目 剣道授業5 回目

1 年 2 組 番 氏名

○前時の復習 ○前後左右の足さばき、基本打突

○基本打突（正面打ち、小手、胴）の打ち方、打たせ方の練習

○基本打突（正面打ち、小手、胴）の出来映え判定試合

めあて 相手の動きを素早くとらえ、正しく基本打突（面、小手、胴）を打とう

評価項目（※A はい B どちらともいえない C いいえ）	自己評価
ふかく心に残ることや、感動することはありませんか。	A・B・C
今までできなかったこと（運動や作業）ができるようになりましたか	A・B・C
「あっ、わかった」「あっ、そうか」と思ったことがありましたか。	A・B・C
精一杯、全力をつくして運動することができましたか。	A・B・C
楽しかったですか。	A・B・C
自分から進んで学習することができましたか	A・B・C
自分のめあてにむかって何回も練習できましたか。	A・B・C
友だちと協力して、仲良く学習できましたか。	A・B・C
友だちとお互いに教えたり、助けたりしましたか。	A・B・C
道具の点検や周囲の安全に気を配りながら練習できましたか。	A・B・C
礼法、所作を気持ちよくこめて行うことができましたか。	A・B・C
自分の課題を意識し、工夫しながら練習に取り組みましたか	A・B・C
基本打突（面・小手・胴）の打ち方、打たせ方が分かりましたか。	A・B・C
審判の仕方が分かりましたか。	A・B・C
相手があげた所を素早く、打つことができましたか。	A・B・C
審判を自信を持ってすることができましたか。	A・B・C

○仲間から認めもらったことやアドバイス（例一声がよく出ていた、もう少し右手の力を強くといふ等）

○基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。（例一竹刀の握りが直ぐに握れるようになってきた等）

●前の授業における自分の課題について、何に気をつけ、意識しながら今日の学習に取り組みましたか。（例一打つと同時に顔みだむことを意識した等）

★礼をするときの気持ちや練習相手（仲間）に対する気持ちについて書きましょう。（笑顔などの表情もあれば書いて下さい）

●基本打突（面、小手、胴）の練習の中で、課題（分からなかったことや難しかったこと、できなかったこと）を書きましょう。

★次の時間は、自分の動きの何を意識して、どうしていきたいかを書きましょう。

(2) 個人技能チェックシート

有効打突の条件である「気・剣・体、残心」を、「打つ側」と「打たせる側」の双方に設定し、各項目において自己評価していくことで、互いに協力して技をつくり合うという意識をもたせながら学習に取り組ませるとともに、毎時間の学習を振り返り、班やペアでよさやアドバイスを伝え合う中で、「有効打突の条件」における技能面の課題を把握する基準とすることをねらいとし、使用していく。

【図4】

【図4】

シート

基本打突「正面打ち、小手、胴」

月 日

班 番 氏名

【打つ時の気・剣・体・残心】

	チェック項目	評価	
気	打つ時の気合い「ヤー」	張りのある大きな声を伸ばして出すことができた。	3
	打ったときの声「メン、コテ、ドウ」	大きな声が出せた。	2
		声が出せなかった。	1
剣	相手の打突部位（面、小手、胴）を竹刀の打突部で打つ	竹刀の打突部で相手の打突部位を「パンッ」「バシッ」と、いい音で打てた。	3
		竹刀の打突部で相手の打突部位を打った。	2
		竹刀が相手の打突部位にうまくあたらない。	1
体	打ったときの姿勢	膝を入れた正しい姿勢で、しっかり踏み込んだ。	3
		膝を入れた正しい姿勢で打つことができた。	2
		姿勢が崩れていた。	1
残心	中段の構えに戻り、相手にそなえる（剣先を相手の「のど」の高さにつける）	素早く、中段の構えに戻る。	3
		中段の構えへ戻る。	2
		中段の構えへ戻らなかった。	1

「気・剣・体的一致」と「残心」

【打たせる時の気・剣・体・残心】

	チェック項目	評価	
気	相手の気合い（声）に応える「ヤー」の声	「さあ、はい」という気持ちで、大きな声が出せた。	3
		声が出せた。	2
		声が出せなかった。	1
剣	打たせる時の竹刀や体の動かし方	後に応じて剣先の外し方や手元のあげ方をし、きれいに打たせることができた。	3
		棒がらずに、打たせることができた。	2
		うまく相手に打たせることができなかった。	1
体	打たせた後の体さばき	打たせた後、正しい方向に素早く体をさばいた。	3
		打たせた後、正しい方向に体をさばいた。	2
		打たせた後、体をさばけなかった。	1
残心	中段の構えに戻る（剣先を相手の「のど」の高さにつける）	打たせた後、素早く、中段の構えに戻る。	3
		中段の構えに戻る。	2
		中段の構えに戻らなかった。	1

(3) 出来映え判定試合相互評価シート

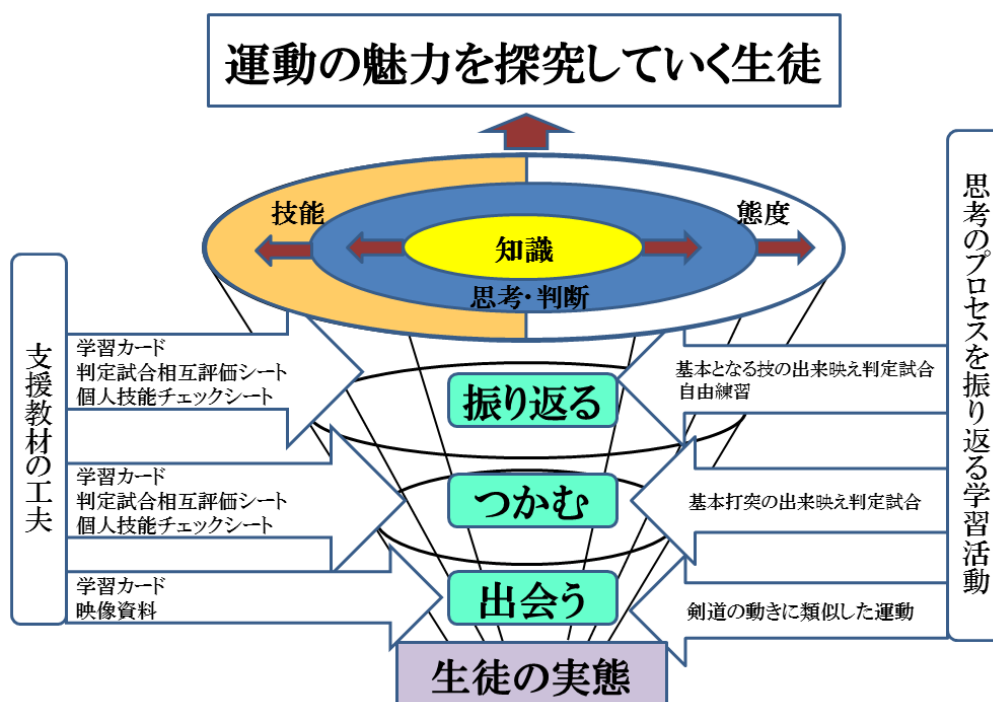
基本打突、基本となる技の毎回の試合において、審判の判定基準として、有効打突の条件である「気・剣・体・残心」を項目ごとに審判がチェックし、その判定に活用させるとともに、出来映え判定試合の中で、「有効打突の条件」における技能面の課題を把握することをねらいとし、使用していく。【図5】

【図5】 技の出来映え判定試合 相互評価シート																																																	
こちらのペアが、より正しく技を打つ、打たせることができているか)																																																	
連続技「小手→面」																																																	
※試合後の話し合いをもとに「よくできている」項目に○、「もう少し」の項目に△をつけて下さい。																																																	
()さん <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <th colspan="2">打ち方</th> <th colspan="2">打たせ方</th> </tr> <tr> <td>気</td> <td>大きな声を出す</td> <td>気</td> <td>大きな声を出す</td> </tr> <tr> <td>剣</td> <td>竹刀の打突部で面・小手・胴を打つ</td> <td>剣</td> <td>打たせる時の竹刀や体の動かし方</td> </tr> <tr> <td>体</td> <td>正しい姿勢で打つ</td> <td>体</td> <td>打たせた後の体さばき</td> </tr> <tr> <td>残心</td> <td>中段の構えに戻る</td> <td>残心</td> <td>中段の構えに戻る</td> </tr> </table>					打ち方		打たせ方		気	大きな声を出す	気	大きな声を出す	剣	竹刀の打突部で面・小手・胴を打つ	剣	打たせる時の竹刀や体の動かし方	体	正しい姿勢で打つ	体	打たせた後の体さばき	残心	中段の構えに戻る	残心	中段の構えに戻る	()さん <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <th colspan="2">打ち方</th> <th colspan="2">打たせ方</th> </tr> <tr> <td>気</td> <td>大きな声を出す</td> <td>気</td> <td>大きな声を出す</td> </tr> <tr> <td>剣</td> <td>竹刀の打突部で面・小手・胴を打つ</td> <td>剣</td> <td>打たせる時の竹刀や体の動かし方</td> </tr> <tr> <td>体</td> <td>正しい姿勢で打つ</td> <td>体</td> <td>打たせた後の体さばき</td> </tr> <tr> <td>残心</td> <td>中段の構えに戻る</td> <td>残心</td> <td>中段の構えに戻る</td> </tr> </table>					打ち方		打たせ方		気	大きな声を出す	気	大きな声を出す	剣	竹刀の打突部で面・小手・胴を打つ	剣	打たせる時の竹刀や体の動かし方	体	正しい姿勢で打つ	体	打たせた後の体さばき	残心	中段の構えに戻る	残心	中段の構えに戻る
打ち方		打たせ方																																															
気	大きな声を出す	気	大きな声を出す																																														
剣	竹刀の打突部で面・小手・胴を打つ	剣	打たせる時の竹刀や体の動かし方																																														
体	正しい姿勢で打つ	体	打たせた後の体さばき																																														
残心	中段の構えに戻る	残心	中段の構えに戻る																																														
打ち方		打たせ方																																															
気	大きな声を出す	気	大きな声を出す																																														
剣	竹刀の打突部で面・小手・胴を打つ	剣	打たせる時の竹刀や体の動かし方																																														
体	正しい姿勢で打つ	体	打たせた後の体さばき																																														
残心	中段の構えに戻る	残心	中段の構えに戻る																																														
()さん <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <th colspan="2">打ち方</th> <th colspan="2">打たせ方</th> </tr> <tr> <td>気</td> <td>大きな声を出す</td> <td>気</td> <td>大きな声を出す</td> </tr> <tr> <td>剣</td> <td>竹刀の打突部で面・小手・胴を打つ</td> <td>剣</td> <td>打たせる時の竹刀や体の動かし方</td> </tr> <tr> <td>体</td> <td>正しい姿勢で打つ</td> <td>体</td> <td>打たせた後の体さばき</td> </tr> <tr> <td>残心</td> <td>中段の構えに戻る</td> <td>残心</td> <td>中段の構えに戻る</td> </tr> </table>					打ち方		打たせ方		気	大きな声を出す	気	大きな声を出す	剣	竹刀の打突部で面・小手・胴を打つ	剣	打たせる時の竹刀や体の動かし方	体	正しい姿勢で打つ	体	打たせた後の体さばき	残心	中段の構えに戻る	残心	中段の構えに戻る	()さん <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <th colspan="2">打ち方</th> <th colspan="2">打たせ方</th> </tr> <tr> <td>気</td> <td>大きな声を出す</td> <td>気</td> <td>大きな声を出す</td> </tr> <tr> <td>剣</td> <td>竹刀の打突部で面・小手・胴を打つ</td> <td>剣</td> <td>打たせる時の竹刀や体の動かし方</td> </tr> <tr> <td>体</td> <td>正しい姿勢で打つ</td> <td>体</td> <td>打たせた後の体さばき</td> </tr> <tr> <td>残心</td> <td>中段の構えに戻る</td> <td>残心</td> <td>中段の構えに戻る</td> </tr> </table>					打ち方		打たせ方		気	大きな声を出す	気	大きな声を出す	剣	竹刀の打突部で面・小手・胴を打つ	剣	打たせる時の竹刀や体の動かし方	体	正しい姿勢で打つ	体	打たせた後の体さばき	残心	中段の構えに戻る	残心	中段の構えに戻る
打ち方		打たせ方																																															
気	大きな声を出す	気	大きな声を出す																																														
剣	竹刀の打突部で面・小手・胴を打つ	剣	打たせる時の竹刀や体の動かし方																																														
体	正しい姿勢で打つ	体	打たせた後の体さばき																																														
残心	中段の構えに戻る	残心	中段の構えに戻る																																														
打ち方		打たせ方																																															
気	大きな声を出す	気	大きな声を出す																																														
剣	竹刀の打突部で面・小手・胴を打つ	剣	打たせる時の竹刀や体の動かし方																																														
体	正しい姿勢で打つ	体	打たせた後の体さばき																																														
残心	中段の構えに戻る	残心	中段の構えに戻る																																														
結果		勝ち・負け 引き分け		対		勝ち・負け 引き分け																																											

(4) 映像資料

映像資料は、初めて剣道を体験する生徒に剣道の特性や成り立ち、伝統的な考え方、行動の仕方を理解させるとともに、試合の映像を視聴させることにより技能のイメージを伝え、関心・意欲の高まりをねらい、使用していく。

4 研究構想図



5 検証のねらいと方途

(1) ねらい

仮説に基づく実践授業により資料を収集、結果を分析し、仮説を検証する。

(2) 対象

久留米市立北野中学校 第1学年2組 35名

(3) 期間

平成24年10月10日（水）～11月14日（水）

(4) 内容と方法

仮説を検証するために、学習計画に従って単元「武道（剣道）」の10時間の授業と事前・事後調査を実施し、資料を収集する。

【内容】

- 3つの段階において、仲間とともに課題を解決していく学習に積極的に取り組むことで、思考・判断の高まりとともに、技能と態度を高めていくことができたか。
 - 思考のプロセスを振り返る学習活動を通して、達成感を感じたり、新たな課題に気付いたりすることで、意欲をもって学習に取り組み、技能と態度を高めることができたか。
 - 支援教材を活用することで、思考のプロセスを振り返ることができ、技能と態度を高めることができたか。
- 以上を、検証するためのデータを収集する。

【方法】

- 事前・事後のアンケートによる調査
- 学習の様相観察（活動の様相、発言、つぶやき、表情など）
- 学習カードの記載内容
- 診断的・形成的・総括的授業評価「体育の授業を観察評価する」高橋建夫 H16, 8)
- 生徒の自己評価、
- 学習後の感想

段階	目指す生徒の姿		手だて	検証の方法	評価の観点
出会う段階	技能	相手の動きに応じた基本動作（中段の構え、体さばき、空間打突）をすることができる。	剣道の動きに類似した運動	様相観察	剣道に類似した運動の中で、剣道の基礎となる動きを行うことができているか。
			相手の動きに応じた基本動作	様相観察	相手の動きに応じて、基本動作を行うことができているか。
	態度	仲間と協力しながら、積極的に学習に取り組むことができる。	剣道の動きに類似した運動	様相観察 学習カードの分析	仲間と協力することができたことなどを記入しているか。
			相手の動きに応じた基本動作	様相観察 学習カードの分析	仲間と協力して、動きを合わせることなどを記入しているか。
		伝統的な行動の仕方を守ることができる。	相手の動きに応じた基本動作	様相観察 学習カードの分析	礼法、作法、所作を守ることが意識しながら行ったことを記入しているか。
	知識	武道の特性や成り立ち、伝統的な考え方を理解できる。	学習カード 映像資料	学習カードの分析	武道の特性や成り立ち、伝統的な考え方について理解することができたことなどを記入しているか。

つかむ段階		基本動作の名称や技術的なポイントが理解できる。	学習カード 映像資料	学習カードの 分析	基本動作の名称や技術的なポイントについて理解したことなどを記入しているか。
	思考・ 判断	知識を基に礼法、所作について考え、伝統的な行動の仕方に関連付けることができる。	学習カード 映像資料	学習カードの 分析	武道の特性や成り立ち、伝統的な考え方を理解し、伝統的な行動の仕方との関連などについて記入しているか。
		相手の動きに応じた基本動作、剣道の動きに類似した運動における課題を把握することができる。	相手の動きに応じた基本動作 剣道の動きに類似した運動	学習カードの 分析	相手の動きに応じた基本動作において把握した課題などについて記入できているか。
	技能	相手の動きに応じた基本動作（基本打突）ができる。	相手の動きに応じた基本動作（基本打突）	様相観察	相手の動きに応じて、基本動作を行うことができるか。
	態度	個人の課題をもち、課題解決を意識しながら、仲間と協力し、積極的に学習に取り組むことができる。	相手の動きに応じた基本動作（基本打突）、基本打突の出来映え判定試合	様相観察 学習カードの 分析	課題解決を意識し、仲間と協力しながら積極的に学習に取り組むことができたことなどを記入しているか。
		公正な態度で、分担した役割を果たそうとすることなどや、禁じ技を用いないなど健康・安全に気を配ることができる。	基本となる技の出来映え判定試合	様相観察 学習カードの 分析	公正な態度で、分担した役割を果たそうとすることや、禁じ技を用いないなど健康・安全について意識したことを記入しているか。
		相手を尊重する気持ちを持ち、伝統的な行動の仕方を守ることができる。	相手の動きに応じた基本動作（基本打突）、基本打突の出来映え判定試合	様相観察 学習カードの 分析	相手を尊重する気持ちを持ち、礼法、作法、所作を守ることが意識しながら行ったことを記入しているか。
	知識	基本動作（基本打突）の名称や技術的なポイントが理解できる。	学習カード	学習カードの 分析	基本動作（基本打突）、基本となる技の名称や技術的なポイントについて理解したことなどを記入しているか。
		伝統的な行動の仕方、相手を尊重する気持ちについて理解できる。	学習カード	学習カードの 分析	伝統的な行動の仕方、相手を尊重する気持ちについて理解したことなどを記入しているか。
	思考・ 判断	基本動作（基本打突）や出来映え判定試合を通して、相手を尊重する気持ち（思いやり、感謝）について考え、自分の態度と関連付けることができる。	学習カード	学習カードの 分析	基本打突や基本打突の出来映え判定試合の中で、相手を尊重する気持ち（思いやり、感謝）について考えたことと、自分の態度と関連付けて記入しているか。
		基本動作（基本打突）において把握した課題を解決するために運動の行い方を工夫できる。	相手の動きに応じた基本動作（基本打突） 基本打突の出来映え判定試合	学習カードの 分析	相手の動きに応じた基本動作（基本打突）、基本となる技において把握した課題や解決するために工夫した運動の行い方について記入しているか。

振り返る段階	技能	相手の動きに応じた基本動作（基本打突）や基本となる技を身に付け、攻防を展開できる。	基本となる技の出来映え判定試合 自由練習	様相観察	相手の動きに応じた基本動作（基本打突）や基本となる技を身に付け、攻防展開することができるか。
	態度	公正な態度で、分担した役割を果たそうとすることなどや、禁じ技を用いないなど健康・安全に気を配ることができる。	基本となる技の出来映え判定試合	様相観察 学習カードの分析	公正な態度で、分担した役割を果たそうとすることや、禁じ技を用いないなど健康・安全について意識したことを記入しているか。
		克己心について理解し、伝統的な行動の仕方を守ることができる。	基本となる技の出来映え判定試合 自由練習	様相観察 学習カードの分析	克己心について理解し、礼法、作法、所作を守れることを意識しながら行ったことを記入しているか。
	知識	基本となる技の出来映え判定試合の仕方や役割に応じた行動の仕方を理解することができる。	学習カード	学習カードの分析	基本となる技の出来映え判定試合の仕方や役割に応じた行動の仕方について理解したことなどを記入しているか。
		克己心について理解することができる。	学習カード	学習カードの分析	克己心について理解することができたことなどを記入しているか。
	思考・判断	基本となる技の出来映え判定試合や自由練習における課題を把握し、課題解決のために運動の行い方を工夫することができる。	学習カード	学習カードの分析	基本となる技の出来映え判定試合や自由練習における課題を把握し、課題解決のために工夫した運動の行い方について記入しているか。
		基本となる技の出来映え判定試合や自由練習の中で、克己心について考え、自分の態度と関連付けることができる。	基本となる技の出来映え判定試合 自由練習	様相観察 学習カードの分析	基本となる技の出来映え判定試合や自由練習の中で、克己心について考えたことと、自分の態度と関連付けて記入しているか。

Ⅵ 研究の実践と考察

1 事前調査

(1) 診断的授業評価

生徒の保健体育科学習に対する意識を調査するため、授業評価尺度（H20.10 『体育授業を観察評価する』）を用いた診断的授業評価【表5】を行った。学級全体の総合評価の平均は 50.09 と、中学校段階の診断基準+（60.00～47.45）に位置しており、生徒達の保健体育科学習に関する意識が高いことがわかった。

【表5】

項目	学級全体の平均点	A	B	C	D	E	F
たのしむ(情意目標)	13.15(+)	15(+)	15(+)	15(+)	11(0)	14(+)	14(+)
できる(運動目標)	10.81(0)	14(+)	10(0)	14(+)	6(-)	8(0)	5(-)
まなぶ(認識目標)	12.03(+)	14(+)	14(+)	11(0)	12(+)	10(0)	7(-)
まもる(社会的行動目標)	14.09(+)	15(+)	15(+)	14(+)	15(+)	14(+)	14(+)
総合評価	50.09(+)	58(+)	54(+)	54(+)	44(0)	46(0)	40(-)

また、診断的授業評価を項目ごとに分析したところ、「情意目標」13.15、「認識目標」12.03、社会的行動目標 14.09 といった（+）の診断基準に位置しているが、「運動目標」が 10.81 と（0）の診断基準に位置しており、「運動ができる」という意識が他の項目よりも低いことがわかった。

(2) 武道（剣道）に関する事前調査

事前のアンケートで、「武道に興味をもったことがあるか」という問いに対して「いいえ」と答えた生徒が 59%【グラフ 1】と低い数値であった。また、「剣道の授業を経験してみたいか」【グラフ 2】という問いに対しては、全体で 85%（男子 88%、女子 81%）の生徒が「はい」と答えている。そして、「剣道にどのようなイメージをもっているか」【グラフ 3】についての質問では、「カッコいい」「迫力がある」と肯定的なイメージを答えた生徒が多かったが、「剣道の学習をする上で不安なことはあるか」【グラフ 4】という問いに対しては、「できるかどうか不安（難しそう）」、「痛そう」、「怪我しそう」といった回答が多く見られた。

これらのことから、これまで経験のない武道に対する興味・関心が低いと、剣道に対しては肯定的なイメージをもち、学習への意欲をもっているが、初めて経験する単位であることや、竹刀を用いて直接的に打突し合うといった特性をもつことから、学習に対して不安を感じている生徒が存在することがわかった。

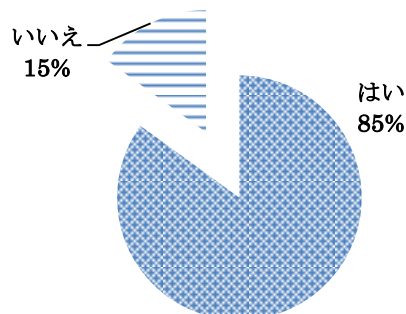
次に、体育の授業で「上手になりたい、できるようになりたい」と思って取り組んでいるか」という問いに対して「よくあてはまる」「あてはまる」と答えた生徒の割合は、97%であり、非常に高い数値を示した。しかし、体育の授業で「前の時間に気付いた課題を意識して練習に取り組んでいますか」という問いに対して「あまりあてはまらない」「あてはまらない」と答えた生徒の割合が 25%、【グラフ 5】「気付いた課題を解決するために工夫して取り組んでいますか」という問いに対しては、「あまりあてはまらない」「あてはまらない」と答えた生徒の割合が、31%【グラフ 6】という数値を示した。

これらのことから、体育の授業で、技能の向上に対する意欲は高いが、そのために以前の学習を振り返ったり、自己の課題を意識したりし、その解決のために工夫していくといった思考・判断力が身に付いていない生徒が存在するということがわかった。

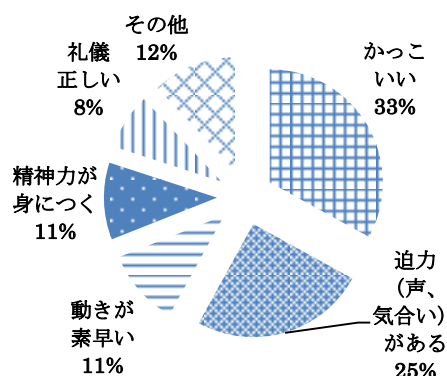
【グラフ1】 武道に興味を持ったことがあるか



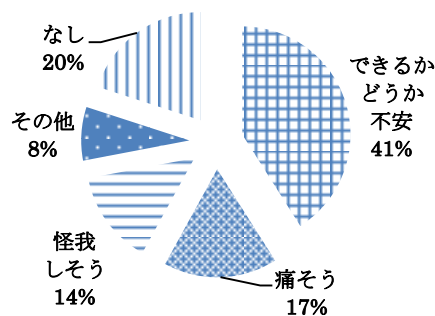
【グラフ2】 剣道を経験してみたいか（全体）



【グラフ3】 剣道のイメージ

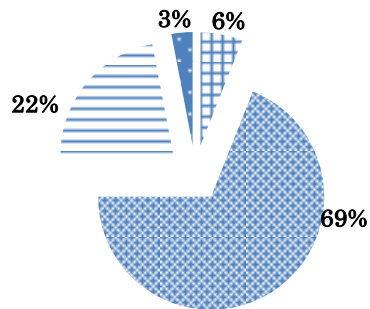


【グラフ4】 剣道に対する不安



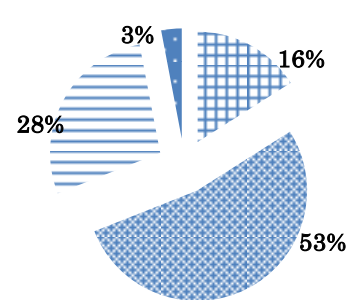
【グラフ5】前の時間に気付いた課題を意識して練習に取り組んでいるか

■ よくあてはまる ■ あてはまる
 ■ あまりあてはまらない ■ あてはまらない



【グラフ6】気付いた課題を解決するために工夫して取り組んでいるか

+ よくあてはまる ■ あてはまる
 - あまりあてはまらない ■ あてはまらない



これらの調査結果をもとに、抽出生徒を次のA・B・C・D・E・Fの6名とした。

抽出生徒	診断的授業評価	武道に興味を持ったことがあるか	剣道を経験してみたいか	前の時間に気付いた課題を意識しているか	気付いた課題を解決するために工夫しているか	剣道についての実態調査
A (男)	診断基準+ (合計58点)	○	○	3	3	剣道について「カッコいい」というイメージを持っており、学習に対して不安を感じていない。
B (女)	診断基準+ (合計54点)	×	○	3	4	剣道について「服装がカッコいい、迫力がある」というイメージを持っているが、ルールなど何もわからないことに不安を感じている。
C (男)	診断基準+ (合計54点)	○	○	3	3	剣道について「迫力があり、動きが素早い」というイメージを持っているが、初めての運動であることに不安を感じている。
D (女)	診断基準0 (合計44点)	×	○	3	2	剣道について「カッコいい」というイメージを持っているが、「自分にもできるのか」という不安を感じている。
E (男)	診断基準0 (合計46点)	○	○	3	3	剣道について「相手を打つ、カッコいい」というイメージを持っているが、「痛そう」といった打たれることに対する不安を感じている。
F (女)	診断基準- (合計40点)	×	×	3	2	剣道について「棒で人の頭を叩く、落ち着いた感じ」といったイメージを持っているが、「ケガをしそうで怖い。ちゃんとできるか」といった不安を感じている。

(○は「はい」、×は「いいえ」の2段階評価。4「よくあてはまる」、3「あてはまる」、2「あまりあてはまらない」、1「あてはまらない」の4段階評価。)

2 出会う段階（第1時～第2時）

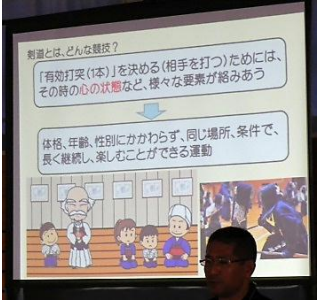
（1）目指す生徒像

- 剣道の動きに類似した運動を通して、初めて体験する動きに出会うとともに、相手の動きに応じた基本動作ができる生徒（技能）
- 伝統的な行動の仕方を守ろうとし、仲間と協力しながら積極的に学習に取り組むことができる生徒（態度）
- 剣道の特性や成り立ち、伝統的な考え方や、基本動作の名称や技術的なポイント、伝統的な行動の仕方について理解できる生徒（知識）
- 剣道の動きに類似した運動や基本動作（中段の構え、体さばき、空間打突）における自己の課題を把握できるとともに、知識を基に礼法・所作について考え、自分の態度と関連付けることができる生徒（思考・判断）

（2）手立て

- 段階的な学習指導過程の工夫
 - ・剣道に初めて触れ、その特性や成り立ち、礼法・所作や相手の動きに応じた基本動作の学習を通して剣道の魅力に「出会う」段階の設定
- 剣道における思考のプロセスを振り返る学習活動
 - ・剣道の動きに類似した運動
- 支援教材の工夫
 - ・学習カード ・映像資料

（3）授業展開

学習活動（◆） 教師の支援（◇）	生徒の姿（生徒 A・B・C・D・E・F 及び全体）
◆オリエンテーション（1 時間目） ◇剣道の授業を始めるにあたり、学習のねらいや単元の流れ、学習の進め方を説明し、学習に対する見通しをもたせた。 また、パワーポイントや試合の映像、模擬刀を使い、剣道の特性や成り立ち、剣道の動きや竹刀の扱い方、礼法（正座、座礼、黙想、立礼）など、基本となる知識を説明し、剣道の学習へ動機付けを行った。【写真 1】 ◆班編制（1 時間目） ・班編制については、事前調査の結果や学級担任と相談の上、男 2～3 名、女子 2 名、計 4 名～5 名の男女混合班を 8 班編制した。	【写真 1】オリエンテーションの様子   【写真 2】模造刀を使っのての説明  凄いね。 刀を初めて見たよ。 興味深く、剣道の試合の映像や模造刀を見つめる生徒の姿が見られた。

◆伝統的な行動の仕方（1 時間目）

- ・立礼、座礼
- ・正座の仕方「左座右起」
- ・練習場所、仲間、指導者への礼
- ・帯刀、提刀、蹲踞

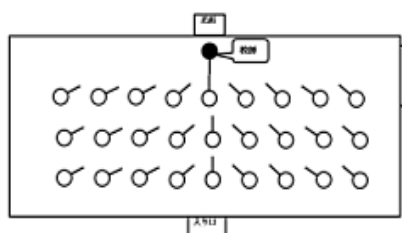
◇正しい礼法・所作を身に付けさせるために、相手の目を見ることや呼吸を合わせることを意識させ、教師の動きに合わせて行わせた。【写真 3, 4】

◆基本動作（1 時間目）【写真 5】

- ・自然体、中段の構え
- ・竹刀の扱い方、振り方

◇それぞれの基本動作の意味やポイントを伝えながら、教師に動きに合わせて、一斉に指導した。【資料 1】

【資料 1】基本動作 隊形図



◆剣道の動きに類似した運動（1 時間目）

- ・新聞紙切り（1 時間目）

◇初めて竹刀を持ち、真っ直ぐに振り下ろす動作を体験させるために、班毎に行わせた。【写真 6】

- ・新聞紙ボール打ち（1 時間目）

◇竹刀を巧みに操作できるように、切った新聞紙を集め、ボールを作り、仲間が投げたボールをタイミングよく竹刀で打つ体験をさせた。【写真 7】

- ・ぞうきんすり足（2 時間目）

◇足さばきの基本である「すり足」の要領をつかませるために、ぞうきんを足で踏んだ状態で「送り足」や「歩み足」を体験させた。【写真 8】

【写真 3】礼法、所作の学習の様子



【写真 4】礼法・所作の学習の様子



【写真 5】中段の構えの学習の様子



初めて体験する伝統的な行動の仕方（礼法、所作）や基本動作に興味をもち、真剣に取り組む生徒の姿が見られた。

右手は上から軽く持つんだ。

すり足のコツが分かってきたよ。

【写真 6】生徒 A 新聞紙切りの様子



【写真 7】生徒 A 新聞紙ボール打ちの様子



【写真 8】生徒 B ぞうきんすり足の様子

【抽出生徒の様子】

生徒 A：どの運動も上手くできていた。新聞紙切りで床に竹刀を当ててしまい、竹刀を止めることに課題をもった。

生徒 B：進んで新聞紙を持つなど、率先して役割を果たそうとする姿が見られた。

生徒 C：楽しく新聞紙切りに何度も挑戦していたが、竹刀の止めることに課題をもった。

生徒 D：楽しく運動に取り組んでいた。右手の力を抜くことに課題をもった。

生徒 E：楽しく運動に取り組んでいたが、真っ直ぐな竹刀の振りに課題をもった。

生徒 F：不安そうにしていたが、新聞紙を上手く切れたことで喜ぶ姿が見られた。

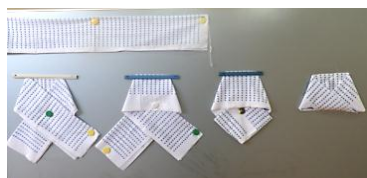
◆防具の着装法、収納法の工夫
(2時間目)

- ・面、胴、垂

◇活動時間や安全面の確保のため、
班で協力させながら、【写真9,10】「速く、正しく」を目標に着装させていった。また、着装や収納については【写真11】のような工夫を行った。

- ・カゴに入れて収納
- ・面紐にホース
- ・胴紐は首の後ろで結束
- ・簡易的な手拭い

【写真11】防具着装、収納の工夫



〈留意事項〉

- ・正座（立て膝）で着装を行う。
- ・小手は左手から着装し、右手から外す。
- ・結束の長さを揃える。など

◆班での振り返り

◇学習を振り返り、互いによさやアドバイスを伝え合い、達成感を感じたり、課題に気付いたりできるように班での振り返りの場を設定した。【写真12】

後ろで結ぶのは
難しそうだな。

早くできたから
手伝うね。

〈生徒Aの感想〉

動きにくかったし、重かった。でも、早く色々な打ち方や守り方を習い試合をしてみたくなった。これからが楽しみです。

〈生徒Fの感想〉

つけ方が難しく、1人ではとてもつけられなかった。手伝ってくれた仲間感謝しています。早く1人でつけられるようになりたいです。

【写真9】防具の着装法の説明



【写真10】班で協力しながら
面を着けあう生徒の様子



【手伝ってくれた仲間への記述】

ぼうぐをいっしょにフキく
れてありがとう。ok/3月2日

でも、竹刀が止められ
ずに床に当たって
しまったよ。

真っ直ぐ振れたから
新聞が上手く切れたね。

【写真12】班での振り返りの様子



「剣道に類似した運動」が上手にできた生徒も、できなかった生徒も、班内で楽しそうに振り返りを行うことができていた。

(4) 考察

① 段階的な指導過程の工夫と支援教材について

剣道の魅力に「出会う」段階を設定し、オリエンテーションにて剣道の特性や歴史、伝統的な考え方について説明し、剣道の試合の映像を見たり、模擬刀を見たりすることで、生徒は剣道についての知識を理解し、関心や意欲の高まりが見られたと考える。

その根拠として、興味をもって試合の映像や模造刀を見つめる生徒の姿【写真 2】が見られたことや、伝統的な行動の仕方の説明に真剣に耳を傾け、正しい動きを意識して行おうとする生徒が多く見られたこと、【写真 3, 4】【資料 2-①、②】のようにどんな運動なのかを理解し、これからの学習への意欲の高まりが生徒の記述に見られたことなどがあげられる。また、「剣道の歴史やどんな競技なのかわかった」【グラフ 7】において、すべての生徒が「満足できた」「ほぼできた」と回答したことからも、特性や歴史を理解することができたと考える。

② 剣道の動きに類似した運動と支援教材について

剣道の動きに類似した運動においては、「やってみたい」「できそうだ」と思わせる活動を仕組んでいくことで班の仲間と協力しながら楽しく剣道の基礎となる動きを体験し、技能を身に付けながら思考を働かせることができたと考える。

その根拠として、生徒 F の学習後の感想【資料 3】のように、剣道に対して不安を感じていた生徒が楽しく剣道の動きに出会い、「できる」喜びを感じることができた記述が見られたことや、【写真 6, 7, 8】のように竹刀の正しい操作や足さばきといった技能のポイントを理解し、身に付けていった姿が多く見られたことがあげられる。

また、【グラフ 8】や生徒 C の感想【資料 4】からも、剣道に類似した運動において、仲間と協力しながら学習することができたことをうかがうことができる。

そして、班や学習カードによる振り返りを行ったことは、自己の動きの課題についてもとらえ、次時への意欲をもたせる上で有効であったと考える。

その根拠として、生徒の授業後の感想【資料 5】では、新聞紙切りの失敗から竹刀を真っ直ぐに振ることができていないことを課題としてつかみ、意識して取り組んでいこ

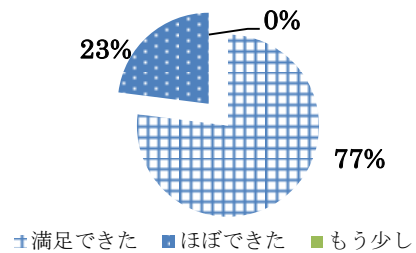
【資料 2-①】生徒の授業後の感想

私は剣道の授業をしたことがなくてちょっと不安だったけどオリエンテーションで剣道をやっている人の映像を見ても迫力があって技をだす速さがとても早かったので、すごいなと思いました。

【資料 2-②】生徒 D の生活ノートの記述

今日は体育で剣道についていろいろと知ることができました。剣道はおもしろそうなので、がんばりたいです。

【グラフ 7】剣道の歴史やどんな競技なのかわかった



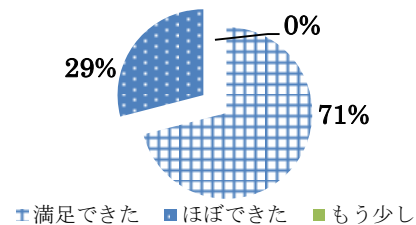
【資料 3】生徒 F の授業後の感想

最初は新聞切りが上手にできるかなあと心配していたけど、一回目から上手にできたのでうれしかったです。ボール打ちはずいぶん早い試合です。

【資料 4】生徒 C の授業後の感想

みんなですかさばしてできたから、次回もすかさばしてやりたい。

【グラフ 8】1 時間目「班の仲間と協力して学習できたか」の自己評価



【資料 5】生徒の授業後の感想

あまりうまく新聞切りができなかったのだから、これからの練習で竹刀を真っ直ぐ振ることをがんばりたいです。

うとする姿がみられた。これは、学習を振り返ることで次の時間への意欲が高まった生徒の姿の表れであると考ええる。

そして、生徒 A の授業後の感想【資料 6】では、礼法・所作を学んだことにより、今後の授業においても意識してこうとする記述が見られた。これは、学んだ知識から自己を振り返り、考えることで態度を高めていく意欲の表れであると考ええる。

【資料 6】生徒 A 授業後の感想

道場にも、しっかりと礼をすること
が分かりました。これからは、気をつけたい



以上のことから、「出会う」段階を設定し、礼法・所作の学習や映像資料などを通して、その特性に触れさせていったことは、生徒の態度を高める上で有効であったと考える。また、剣道の動きに類似した運動を取り入れたことは、「できそうだ」といった感覚をつかませるとともに、班内で役割分担し、協力しながら楽しく活動を行うことによる態度の高まりが見られたことや、失敗体験から技能における自己の課題に気付いていくことができたことから有効であったと考える。

3 つかむ段階（第3時～第6時）

（1）目指す生徒像

- 相手の動きに応じた基本動作（中段の構え、体さばき、基本打突の打ち方、打たせ方）ができる生徒（技能）
- 伝統的な行動の仕方を守ろうとするとともに、公正な態度や自己の役割を果たすこと、安全面を意識し、仲間と協力しながら積極的に学習に取り組むことができる生徒（態度）
- 基本動作の名称や技術的なポイント、相手を尊重する気持ちや伝統的な行動の仕方について理解できる生徒（知識）
- 相手の動きに応じた基本動作（基本打突の打ち方、打たせ方）や基本打突の出来映え判定試合を通して、「相手を尊重する気持ち」について考え、自分の態度と関連付けるとともに、個人の課題を解決していくために運動の行い方を工夫している生徒（思考・判断）

（2）手立て

- 段階的な学習指導過程の工夫
 - ・相手の動きに応じた基本動作（基本打突）の学習を通して「相手を尊重する気持ち」について考え、剣道の魅力を感じる「つかむ」段階の設定
- 剣道における思考のプロセスを振り返るための学習活動
 - ・基本打突の出来映え判定試合（班内）
- 支援教材の工夫
 - ・学習カード ・ 個人技能チェックシート ・ 出来映え判定試合相互評価シート

(3) 授業展開

学習活動 (◆) 教師の支援 (◇)

◆相手の動きに応じた基本動作

(体さばき、空間打突、竹刀や胴への打突)

- ・ペアで向かい合い、相手と呼吸を合わせて礼法、所作を行うとともに、教師の号令に合わせて、体さばきや空間打突、竹刀、胴への打突を行う。

※「元立ち」は、教師の号令に合わせた相手の打突を受ける動作を行う。

※送り足の練習では、「ヤー」の発声、
竹刀や胴への打突は「メン」「コテ」
「ドウ」の発声とともに行う。

※相手との距離（間合い）を保つこと

※3 挙動→2 挙動への発展

◇号令をかけながら、基本動作の留意点について説明した。また、安全の確保や防具に慣れるため、小手を着用させた。

◆基本打突（正面、小手、胴）の打ち方、 打たせ方

※体さばきの発展

「その場」→「送り足」→「踏み込み足」

※打突について

打った瞬間に力を抜くこと

打ったときの音で強さを判断すること

※打つ側、打たせる側の体さばき、残心
◇有効打突の条件である「気・剣・体の一致と残心」について説明を行い、毎回の個人技能チェックシートの振り返り【資料 7】により意識させた。また、正しく打つためには、正しい打たせ方が必要であることにも気付かせるとともに、「相手を尊重する気持ち」についても関連させながら考えさせた。

【写真17】「相手を尊重する気持ち」について



生徒の姿 (生徒 A・B・C・D・E・F 及び全体)

竹刀の先を下げた方がいいよ。

単元当初は、全体的に声も小さく、動きもぎこちなかったが、授業を重ねる毎に、大きな声で、相手と動きを合わせ行っていくことができる生徒が増えていった。

【写真13】基本動作を行う生徒C



【写真14】基本動作で胴を打突する生徒D

外しそう
でこわい

手加減しないでいいよ



【写真15】面を打たせる生徒D



打たせた後の体さばきに課題をもっていたが、意識し、工夫していく中で正しい打たせ方を身に付け、相手と気持ちを合わせた残心までできるようになった。

【資料 7】生徒 D 個人技能チェックシート

[illegible]

「氣・劍・体の一致」と「残心」

【打たせる時の声・刻・体感】		チェック項目	評価
相手の声の聞こえに反応する	「ア」の声	「あ、こいついって」気持ちで、大きな声が出た。 声が出た。	3
打たせる時の竹刀や 相手の数かた方		声が出た。 相手の数かた方と争いのあがり。 いかに打たせることができた。 痛がった。打たせることができた。 うまく相手に打たせることができなかった。	1 1 1 1
打たせた後の様子を 見る		打たせた後、いかに相手に痛がったかを見た。 相手の様子を見た。 打たせた後、いかに相手に痛がったかを見た。 打たせた後、いかに相手に痛がったかを見た。	1 1 1 1
試合中相手の様子 （相手を相手の「い」の目）		試合中相手の様子。 試合中相手の様子。 試合中相手の様子。 試合中相手の様子。	1 1 1 1

前の時間2点だった「打つ時」の「残心」、
「打たせる時」の「残心」と「体」の項
目が、それぞれ3点に上がった。

【写真16】個人技能チェックシート記入の様子



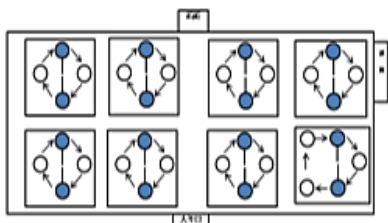
有効打突の条件である「気・剣・体の一致と残心」のそれぞれの項目について自己や仲間の動きを振り返り、よさやアドバイスを伝え合う場面を設定した。

◆基本打突の出来映え判定試合Ⅰ

(班内、5時間目)【写真18】

※班内でペアを組み、交互に2本ずつ面(小手・胴)を打つ。審判は「気・剣・体・残心」のそれぞれの項目において基準を満たしていると思ったら手を挙げ、その数を「相互評価シート」【資料8】に記入し、総合得点(8点満点)により、個人の達成度を判定する。審判と試合者が交代時に班で集まり、よさやアドバイス、判定の理由について伝える。【資料9】
◇試合の方法について、一つの班に実際に行わせながら説明を行い、その後、号令をかけながら各班一斉に進行を行う。

【資料9】基本打突の出来映え反映試合隊形図



◆基本打突の出来映え判定試合Ⅱ

(班内、6時間目)【写真18】

※班内でペアを組み、交互に2本ずつ面(小手・胴)を打つ。審判は「気・剣・体・残心」のそれぞれの項目を基に、総合的により正しく、大きな声を出して打てていると思ったら手を挙げ、勝敗を決定する。審判は、「相互評価シート」に「よさ」には○、課題については△を記入し、審判と試合者が交代時に班で集まり、判定の理由などについて伝える。
◇試合の方法について、一つの班に実際に行わせながら説明を行う。その後、教師が号令をかけながら各班一斉に進行を行う。

【資料8】基本打突の判定試合Ⅰの相互評価シート

評価項目	評価
気	大きな「ヤー」「メン」
剣	竹刀で相手の面を打つ
体	正しい姿勢(腰を入れる)
残心	中段の構えに戻る
合計	5点

評価項目	評価
気	大きな「ヤー」「メン」
剣	竹刀で相手の面を打つ
体	正しい姿勢(腰を入れる)
残心	中段の構えに戻る
合計	6点

「気」と「体」が1点、「剣」と「残心」が2点
合計6点

生徒C

評価項目	評価
気	大きな「ヤー」「メン」
剣	竹刀で相手の面を打つ
体	正しい姿勢(腰を入れる)
残心	中段の構えに戻る
合計	6点

〈生徒Cの感想〉

「打つこと」「剣」はできているので、次は、しっかり踏み込んで『体』の正しい姿勢を意識していきたい。」

【写真18】基本打突の出来映え判定試合



【写真19】基本打突の出来映え判定試合を行う生徒F



【資料10】生徒F 学習カードの記述

面を打つときは、気をいれて、えんりよせず、にしっかり打ち、「バシッ」という音が道場に響きわたるように意識して打ち、声も、「ヤー」と大きな声で、いえるようにがんばっています。

【資料11】基本打突の判定試合Ⅱの相互評価シート

基本打突(面、小手、胴)判定試合 相互評価シート			
(正しく基本打突を打つことのできるかの判定)			
評価項目	評価	評価項目	評価
「正面打ち」	8点	「面」	8点
気	大きな「ヤー」「メン」	気	大きな「ヤー」「メン」
剣	竹刀で相手の面を打つ	剣	竹刀で相手の面を打つ
体	正しい姿勢(腰を入れる)	体	正しい姿勢(腰を入れる)
残心	中段の構えに戻る	残心	中段の構えに戻る
合計	8点	合計	8点

生徒F

「気」において評価された

【資料12】生徒A 基本打突の判定試合Ⅱの感想

正直うまく打てるか緊張していたけど、正確に強く、しっかりと打て、今日の学習を助けたので、よかった。楽しかった。

◆ペアで課題に応じた練習

※前時に行った班での振り返りや仲間からの評価、アドバイス、学習カードに記入した課題を意識し、工夫しながら練習を行う。【写真20】

◇巡視しながら、できている点の評価や、つまずきに対して指導するなどの支援を行う。【写真21】

【写真21】つまずきに対する支援



〈具体的な支援の内容〉

- ・打突の音と踏み込む音が同時になるようにする
- ・胴を打つときは、手首を返して右手の甲が上を向くようにする
- ・竹刀を振り下ろす瞬間に力を入れて、打ったら力を抜くこと など

◆班内での振り返り

◇学習を振り返り、互いによさやアドバイスを伝え合い、達成感を感じたり、課題に気付いたりできるよう班での振り返りの場を設定した。【写真22】 また、巡視しながら、話し合いが進まない班に対しては発言を促す等の支援を行った。

【写真20】課題に応じた練習を行う生徒A



それぞれの課題を意識しながらペアで課題に応じた練習に取り組む姿が見られた。

【抽出生徒の様子】

生徒A：動きのポイントや音を意識しながら、正確に打突することができていたが、残心がおろそかになることに課題をもっていた。

生徒B：ペアと互いにアドバイスやよさを伝え合いながら、熱心に練習に取り組む姿が見られた。打突の音に課題をもって取り組んでいた。

生徒C：打突の後の送り足と残心に課題をもって取り組む姿が見られた。また、姿勢や声を仲間から認められることで自信を深めていった。

生徒D：打った後、打たせた後の体さばきに課題をもって取り組んでいたが仲間からのアドバイスにより身に付けていった。また、打突の強さも課題としていたが、次第に強く打突できるようになっていった。

生徒E：面と小手の踏みこみ足の幅の違いを課題として意識しながら、繰り返し練習に取り組む姿が見られた。

生徒F：打突前の発声、打突時の発声を課題として練習に取り組んでいたが、仲間から認められることで自信を深めた。

【写真22】班内での振り返りの様子



次、やってみよう。

振りが少し右にずれているよ

(4) 考察

① 段階的な学習指導過程の工夫と支援教材について

「つかむ」段階において、班やペアで協力しながら、相手の動きに応じた基本動作（体さばきや空間打突、竹刀や胴への打突）や実際に面を付けての基本打突（正面、小手、胴）の学習、自己の課題解決を図る学習を技能の習得状況に応じて設定するとともに「相手を尊重する気持ち」について考えさせ、「基本打突の出来映え判定試合」につなげていったことは、技能とともに、態度を高めていく上で有効であったと考える。また、「学習カード」や「個人技能チェックシート」を活用し、班の仲間からの評価やアドバイスを基に、自己の課題を把握し、工夫するといった思考を繰り返していくことで、技能や態度を高めていくことにつながったと考える。

その根拠として、まず、相手の動きに応じた基本動作（体さばき、空間打突、竹刀や胴への打突）の学習では、当初、大きな声を出して、それぞれの動きのポイントを理解し、意識しながら行う生徒もいれば、声を出すことを恥ずかしがったり、足さばきに集中するあまり、竹刀の握りや中段の構えがおろそかになったりする生徒【写真13】、相手に遠慮し、相手の胴に竹刀が触れる程度でしか打てない生徒【写真14】などが見られた。しかし、仲間の「手加減しないで打ってもいいよ」といったアドバイス【資料13-①】により、自己の課題を把握し【資料13-②】、意識しながら取り組んだ結果、【13-③】技能が高まったことを実感している記述【資料13-⑤】が見られたことがあげられる。また、相手を尊重する気持ちについての学習【写真17】から、手加減をせずに、真

【資料13】生徒Dの学習カードの記述

〈4時間目の学習カード〉

【資料13-①】	とやアドバイス かを強くといひよ等	●前の授業における自分の課題について、何に気をつけ、意識をしながら今日の学習に取り組みましたか。〈第一打つと同時に足さばきを強く意識した等〉
手かげんしないで打ていいよ。		
●基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。		
竹刀をし、かりあてることができるようになりました。		
●基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。		
竹刀をし、かりあてることができるようになりました。		
●基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。		
竹刀をし、かりあてることができるようになりました。		

【資料13-②】

●前の授業における自分の課題について、何に気をつけ、意識をしながら今日の学習に取り組みましたか。〈第一打つと同時に足さばきを強く意識した等〉
手かげんしないで打ていいよ。
●基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。
竹刀をし、かりあてることができるようになりました。
●基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。
竹刀をし、かりあてることができるようになりました。
●基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。
竹刀をし、かりあてることができるようになりました。

【資料13-③】

●前の授業における自分の課題について、何に気をつけ、意識をしながら今日の学習に取り組みましたか。〈第一打つと同時に足さばきを強く意識した等〉
手かげんしないで打ていいよ。
●基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。
竹刀をし、かりあてることができるようになりました。
●基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。
竹刀をし、かりあてることができるようになりました。
●基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。
竹刀をし、かりあてることができるようになりました。

〈5時間目の学習カード〉

●前の授業における自分の課題について、何に気をつけ、意識をしながら今日の学習に取り組みましたか。〈第一打つと同時に足さばきを強く意識した等〉	【資料13-④】
手かげんしないで打ていいよ。	●前の授業における自分の課題について、何に気をつけ、意識をしながら今日の学習に取り組みましたか。〈第一打つと同時に足さばきを強く意識した等〉
●基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。	●前の授業における自分の課題について、何に気をつけ、意識をしながら今日の学習に取り組みましたか。〈第一打つと同時に足さばきを強く意識した等〉
竹刀をし、かりあてることができるようになりました。	●前の授業における自分の課題について、何に気をつけ、意識をしながら今日の学習に取り組みましたか。〈第一打つと同時に足さばきを強く意識した等〉
●基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。	●前の授業における自分の課題について、何に気をつけ、意識をしながら今日の学習に取り組みましたか。〈第一打つと同時に足さばきを強く意識した等〉
竹刀をし、かりあてることができるようになりました。	●前の授業における自分の課題について、何に気をつけ、意識をしながら今日の学習に取り組みましたか。〈第一打つと同時に足さばきを強く意識した等〉
●基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。	●前の授業における自分の課題について、何に気をつけ、意識をしながら今日の学習に取り組みましたか。〈第一打つと同時に足さばきを強く意識した等〉
竹刀をし、かりあてることができるようになりました。	●前の授業における自分の課題について、何に気をつけ、意識をしながら今日の学習に取り組みましたか。〈第一打つと同時に足さばきを強く意識した等〉

【資料13-⑤】

●前の授業における自分の課題について、何に気をつけ、意識をしながら今日の学習に取り組みましたか。〈第一打つと同時に足さばきを強く意識した等〉
手かげんしないで打ていいよ。
●基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。
竹刀をし、かりあてることができるようになりました。
●基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。
竹刀をし、かりあてることができるようになりました。
●基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。
竹刀をし、かりあてることができるようになりました。

【資料13-⑥】

●前の授業における自分の課題について、何に気をつけ、意識をしながら今日の学習に取り組みましたか。〈第一打つと同時に足さばきを強く意識した等〉
手かげんしないで打ていいよ。
●基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。
竹刀をし、かりあてることができるようになりました。
●基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。
竹刀をし、かりあてることができるようになりました。
●基本打突（面、小手、胴）の中で、成果（分かったことや気付いたこと、できるようになったこと）を書きましょう。
竹刀をし、かりあてることができるようになりました。

➡

剣に、全力で行うことが自他を大切にすることに気付き、相手に感謝しながら礼をしたといった記述【資料13-⑥】や、態度の変容が見られたことがあげられる。

次に、基本打突（正面、小手、胴）の学習やペアで自己の課題に応じた学習では、打ち方が上達するためには、打たせ方が上手にできることが大切なことを意識させるため、個人技能チェックシート【資料7】を使い、「打つ側」「打たせる側」の「気・剣・体、残心」について振り返らせたり、学習カード【資料13】で、班やペアからもらったアドバイスを基に課題を把握し、意識し、工夫しながら課題に取り組んでいった思考過程の振り返りを繰り返したりすることで、生徒Dの動きの変容【写真15】や【資料13-④、⑤】のような記述が見られたことから、思考・判断の高まりとともに技能が高まっていったことがうかがえる。また、【資料14】のように、打たせてくれる相手に感謝している生徒Cの記述が見られたことから、「打つ側」「打たせる側」の双方による振り返りをさせていったことで、相手を尊重するといった態度の高まりにもつながっていったと考える。

【資料14】生徒C「礼をするときの気持ち」の記述

前回までは相手を「自分が打つ相手」と考えてしまう部分がありました。でも今回から「打たせてもらう相手」と考えて、取り組むことができたと思います。

② 基本打突の出来映え判定試合と支援教材について

基本打突の出来映え判定試合Ⅰにおいては、生徒Eの感想【資料15】のように、初めて行う試合形式での学習であったため、試合の方法や審判の仕方を理解できず、進行に戸惑う生徒や、審判に自信をもてない生徒、恥ずかしがって声を出することができない生徒や動きが消極的な生徒が見ら

【資料15】生徒Eの基本打突の出来映え判定試合Ⅰの感想

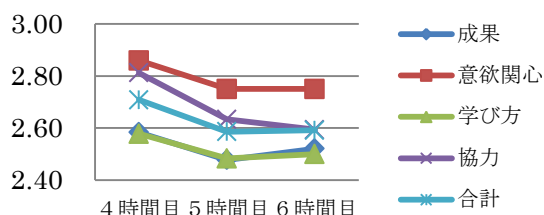
面のこの部分に当たることが出来なかった。審判がとてむすかしかった。

れた。相互評価シートにおいても、十分に活用することができておらず、班での振り返りにおいても活発な話し合いは見られなかった。また、形成的授業評価の推移【グラフ 9】にみられるように各項目において低下が見られた。これは、1 試合にかかる時間が長く、十分な運動量を確保できなかったことや、生徒に試合のねらいや方法などを十分に理解させることができなかったためであると考えられる。

基本打突の出来映え判定試合Ⅱにおいては、判定の基準について、「気・剣・体、残心」の項目を基に、どちらがより正しく打っていたかを総合的に判断し、相対的に判定を行う方法であることや、試合運営・審判についても前回の経験から、前回よりも時間をかけず、スムーズに行うことができていたことが、生徒 F の授業後の感想【資料 16】からもうかがうことができる。しかし、基本打突出来映え判定試合Ⅰ、Ⅱにおける「試合や審判の仕方がわかったか」【グラフ 10】や「審判に自信を持って行うことができたか」【グラフ 11】の推移からもわかるように、試合や審判の仕方を十分に理解し、その判定に自信をもって行うことができるまでには至っておらず、今後、経験を重ねていく中で、審判や運営の仕方を理解し、公正に自分の役割を果たすといった態度の高まりにもつながっていくものと考えられる。また、生徒 A の授業後の感想【資料 12】から、これまで学習してきた基本打突を振り返り、生かしながら、より正しく基本打突が身に付いているかを競い合う楽しさを感じることができたことがうかがえる。そして、生徒 F の記述【資料 10】から、打突前の「ヤー」の発声や、打突の強さ、「気」と「剣」を課題としていた生徒 F が、相互評価シート【資料 11】や班での振り返り【写真 22】において仲間から認められ、評価されたことにより、自己の技能の高まりを実感した記述【資料 16】が見られたことや、【写真 20】のように、基本打突の出来映え判定試合を通して、自己の課題に積極的に取り組んでいく生徒の姿が多く見られたことから、思考・判断しながら、技能を高めていこうとする意欲の高まりをうかがうことができる。

以上のことから、「つかむ」段階を設定し、支援教材を活用しながら、班やペアと協力する中で課題を解決していく活動を行い、生徒の発達段階に応じた基本動作から基本打突の出来映え判定試合につなげていったことは、互いにより正しく打つ、打たせるといった技能を身に付けながら、相手を尊重する気持ちについて考え、自分の態度と関連付けることで剣道の魅力を感じるという段階のねらいからも有効であったと考える。また、基本打突の出来映え判定試合においては、生徒にとって理解しやすく、技能の発達段階に応じた試合を工夫し、設定していくことで、より仲間と協力しながら課題を解決し、技能や態度の高まりへとつなげていけるのではないかと考える。

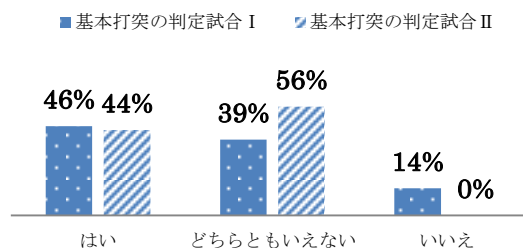
【グラフ 9】 4～6 時間目の形成的授業評価の推移（学級平均）



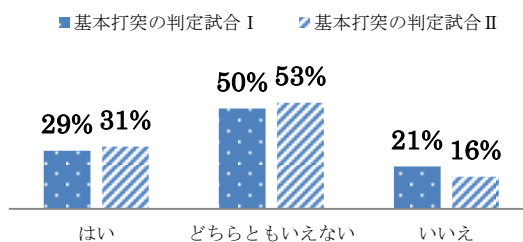
【資料 16】 生徒 F の基本打突の出来映え判定試合Ⅱの感想

判定試合では、しっかり判定し、前回したとき、ほとんどのミスが、今日は、すばやくできたと思います。打つときは、しっかり声を出して、打てたのでよかったです。自分で前回よりも成長している！と自分でも思います。 Yeah! 頑張れ Yeah!

【グラフ 10】 試合や審判の仕方がわかったか



【グラフ 11】 審判に自信を持って行うことができたか



4 振り返る段階（第7時～第10時）

（1）目指す生徒像

- 相手の動きに応じた基本動作や基本となる技ができ、それを用いて相手との攻防を展開することができる生徒（技能）
- 伝統的な行動の仕方を守ろうとするとともに、公正な態度や自己の役割を果たすこと、安全面を意識し、仲間と協力しながら積極的に学習に取り組むことができる生徒（態度）
- 「克己の心」や、有効打突の条件、出来映え判定試合の行い方、審判の仕方が理解できる生徒（知識）
- 技の出来映え判定試合や自由練習を通して、「克己の心」について考え、自分の態度と関連付けるとともに、個人の課題を解決するために運動の行い方を工夫している生徒（思考・判断）

○ 段階的な学習指導過程の工夫

- ・これまでの学習を振り返り、生かしながら、基本となる技の出来映え判定試合や自由練習において勝敗を競い合ったり、自由に攻防し合ったりする中で「克己の心」について考え、剣道の魅力を味わう「振り返る」段階の設定

○ 剣道における思考のプロセスを振り返る学習活動

- ・基本となる技の出来映え判定試合
- ・自由練習

○ 支援教材の工夫

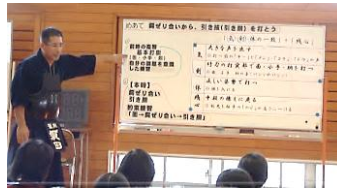
- ・学習カード ・個人技能チェックシート ・出来映え判定試合相互評価シート

（3）授業展開

学習活動（◆） 教師の支援（◇）	生徒の姿（生徒A・B・C・D・E・F及び全体）
◆防具の着装 ◇面を着装できたペアから、課題練習に取り組む時間を設定し、着装にかかる時間の短縮を図った。【写真23】 ※授業前の休み時間に素早く胴と垂れの着装を済ませ、打ち込み台を使い、自主的に練習に取り組む生徒の姿【写真24】も見られた。 ◆相手の動きに応じた基本動作 (体さばき、空間打突、竹刀や胴への打突) ◇号令の速度を徐々に早めながら行わせるとともに、動きのポイントを端的に伝えていった。 〈基本動作における動きのポイント例〉 ・面を打突後は、剣先を前に向け、肘を伸ばす ・送り足の後の足の位置、素早い引きつけ ・中段の構えの剣先の位置 など	【写真23】振り返る段階 防具着用の様子  互いに協力して着け合う姿が多く見られるとともに、1人で面を着装できる生徒が増えてきた。 【写真25】生徒F 基本動作の様子  ※大きな声を出し、正しい動きを意識して基本動作ができるようになってきた。 生徒の多くが、教師の号令に合わせ、動きのポイントを意識しながらしての動きに応じた基本動作を行うことができていた。

◆学習のめあてと学習内容の確認、
自己の課題の発表

【写真26】めあて、学習内容の確認



◇本時の学習のめあてや学習内容の確認【写真26】を行うとともに、自分が意識して取り組む課題について発表させた。【写真27】

◆ペアで課題に応じた練習

◇これまでの学習の中で学んだ技や動きのポイントを振り返り、自己の課題としている動きや技を練習する場面を設定する。

◇巡視しながら、できている点の評価や、つまづきに対して指導するなどの支援を行う。

〈支援の具体的内容〉

- ・「小手、面」における左足の引きつけ
- ・正しい位置での「鰐ざり合い」
- ・「引き胴」における足さばき など

◆基本となる技【しかけ技】

- ・引き技（引き胴）の打ち方、打たせ方

※技の発展

「鰐ざり合い→引き胴」



「正面打ち→鰐ざり合い→引き胴」

- ・二段の技（小手、面）の打ち方、打たせ方

※技の発展

「大きく」 → 「小さく、リズムよく」

◇「打ち方、打たせ方」では、模範を示し、イメージをもたせた。【写真31】

【写真31】引き技の打ち方、打たせ方の模範



◇それぞれの技について、どのような場面で使う技なのかについての説明を行う。

小手、面の時に、竹刀の打突部で打てなかったので、意識して練習したいです。

「基本となる技」における「気・剣・体、残心」から、自己の動きを振り返り、課題をとらえることができていた。

踏みこみ足と打突を同時にすることを意識し、工夫しながら練習に取り組んでいくことで、少しずつタイミングが合っていた。

【写真27】生徒F 自己の課題の発表



【写真28】課題練習に取り組む生徒Eの様子



【写真29】課題練習の打ち合わせをする生徒B

連続技をリズムよく打てるように練習させて。

上手に打たせることができるように頑張るよ。



打たせ方も難しい

「小手、面」の打たせ方における体さばきを課題としてとらえている感想が多く見られた。

【写真30】生徒Bのペア「小手、面」の様子



【写真32】生徒C「鰐ざり合い」の様子



当初は、技や動きが連続するため、一つひとつの動きが止まり、次の動きを考えてから打つ生徒の姿が見られたが、次第にスムーズに技や動きを連動させて打つことができる生徒が見られるようになった。

◆約束練習

- ・正面打ち→鍔ざり合い→引き胴→小手、面

※決められた打突部位を気を切らずに連続して打突する。

◇声を伸ばし、できるだけ息を切らずに行わせる。

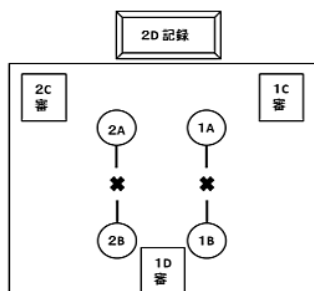
◆基本となる技の出来映え判定試合（ペア対抗）

- ・正面打ち→鍔ざり合い→引き胴（9 時間目）
- ・小手→面（10 時間目）

※2 班合同、ペア対抗で勝敗を競う。交互に1 本ずつ「面→鍔ざり合い→引き胴」（9 時間目）、「小手→面」（10 時間目）を打つ。審判は、「気・剣・体・残心」のそれぞれの項目を基に、総合的により正しく打つ、打たせるといった動きができていると思ったペアに手を挙げ、勝敗を決定する。審判は、「相互評価シート」【資料 17】に「よさ」には○、課題については△を記入し、審判と試合者が交代時に全員が集まり、判定の理由などについて伝える。

【写真 35】

【資料 18】基本となる技の出来映え判定試合隊形図



◇試合の方法について、実際に行わせながら説明を行う。その後、それぞれの試合場毎に役割を分担させ、生徒により進行を行わせる。【資料 18】

【写真 33】生徒 D 約束練習の様子】



相手の動きに合わせて、素早く体をさばき、上手に打たせることができていた。

【写真 34】基本となる技の出来映え判定試合の様子



ペア対抗での対戦であるため、互いに動きを合わせ、より正しく打つ、打たせるといった意識の高まりが見られ、技能の高まりにつながった。

つかむ段階の出来映え判定試合に比べ、試合運営や判定をスムーズに行えることができるようになってきた。

【写真 35】試合者、審判が集まり判定理由の確認



【資料 17】基本となる技の出来映え判定試合相互評価シート（生徒 A のペア対生徒 C のペア）

技の出来映え判定試合 相互評価シート (どちらのペアが、より正しく技を打つ、打たせることができているか) 連続技「小手→面」			
生徒 A のペア C.D		生徒 C のペア C.D	
打ち方	打たせ方	打ち方	打たせ方
気 大きな声を出す	気 大きな声を出す	気 大きな声を出す	気 大きな声を出す
剣 竹刀の打突部で面・小手・胴を打つ	剣 打たせる時の竹刀や体の動かしか	剣 竹刀の打突部で面・小手・胴を打つ	剣 打たせる時の竹刀や体の動かしか
体 正しい姿勢で打つ	体 打たせた後の体さばき	体 正しい姿勢で打つ	体 打たせた後の体さばき
残 中顔の横えに度る	残 中顔の横えに度る	残 中顔の横えに度る	残 中顔の横えに度る
)さん		)さん	
打ち方	打たせ方	打ち方	打たせ方
気 大きな声を出す	気 大きな声を出す	気 大きな声を出す	気 大きな声を出す
剣 竹刀の打突部で面・小手・胴を打つ	剣 打たせる時の竹刀や体の動かしか	剣 竹刀の打突部で面・小手・胴を打つ	剣 打たせる時の竹刀や体の動かしか
体 正しい姿勢で打つ	体 打たせた後の体さばき	体 正しい姿勢で打つ	体 打たせた後の体さばき
残 中顔の横えに度る	残 中顔の横えに度る	残 中顔の横えに度る	残 中顔の横えに度る
結果 勝ち・負け 引き分け		結果 勝ち・負け 引き分け	

審判は、「剣」、「体」、「残心」は互角であったが、「気」の項目で 4 班（生徒 A のペア）が勝っていると判断した。

〈生徒 C の感想〉

「負けたけど、友だちが『少しの差だったと思うよ』と言ってくれた。今まで頑張ってきたので悔いはないです。」

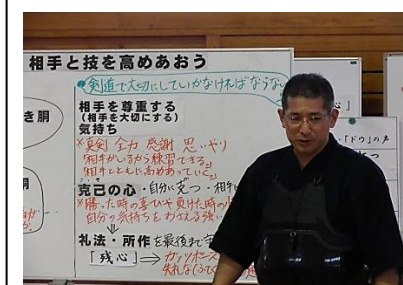
◆自由練習（8,9,10 時間目）

◇これまでの学習を振り返り、生かしながら積極的に技を出し合い、自由に攻防を行わせた。

※自由練習における対戦相手

- ・これまで練習してきたペア
- ・班内で交代（男女の対戦）
- ・全員で相手を取り、時計回りで一人ずつ相手を交代しながらの対戦

【写真 36】「克己の心」についての学習



◇「基本となる技の出来映え判定試合」、「自由練習」の中で、つかむ段階で考えさせた「相手を尊重する気持ち」について振り返り、つなげながら「克己の心」についても考えさせた。【写真 36】

〈生徒 D の感想〉

色々な人と練習できて楽しかった。もっと積極的に打ちたい。

〈生徒 A の感想〉

楽しいけど相手との駆け引きが難しい。練習通りにはいかない。

【写真 37】男子生徒と自由練習を行う生徒 D



【写真 38】自由練習を行う生徒 A



当初、男女での対戦において遠慮したり、怖がりする生徒が見られたが、徐々に積極的に打ち合う姿が見られた。また、技を出してはいるが、しっかり打ちきって残心までつなげることができている生徒は少なかった。

【資料 19】克己の心を学習しての生徒の感想

試合に勝ったからと言ってよろこんでいらず、相手に感謝することが大切だ。剣道は本当に礼法や礼儀の学べるものだと思います。

(4) 考察

① 段階的な学習指導過程の工夫と支援教材について

「振り返る」段階において、継続して行ってきた相手の動きに応じた基本動作の練習と、支援教材を活用し、これまでの学習を振り返り、生かしながら、基本となる技（二段の技、引き技）や自己の課題解決を図る学習、約束練習を設定し、「基本となる技の出来映え判定試合」、「自由練習」につなげていったことは、課題を把握し、工夫しながら取り組んでいくといった思考の高まりとともに、技能や態度を高めていく上で有効であったと考える。

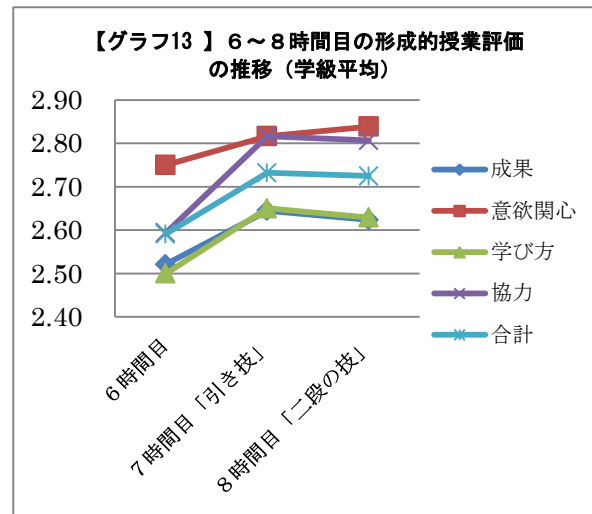
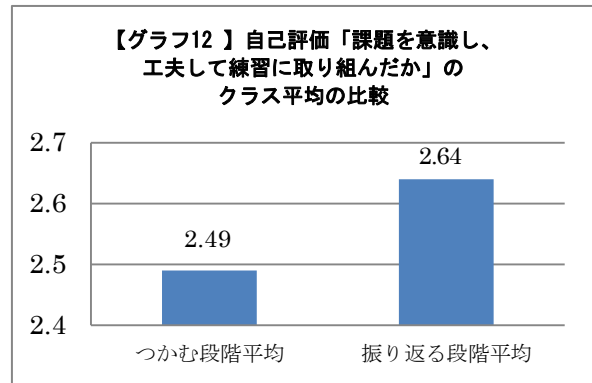
その根拠として、まず、毎時間行ってきた相手の動きに応じた基本動作（体さばき、空間打突、竹刀や胴への打突）【写真 25】では、相手と対面しての体さばきや竹刀・胴への打突における動きのポイントを理解し、大きな声を出し、相手の動きに合わせ、正しい動きができる生徒が多く見られるようになった。

【資料 20】課題に応じた練習についての生徒の感想

面、小手、胴の技を習って、私はうまい。小手を相手にあてることができていなかったけど相手の人におわがいて小手を練習していくうちに、少しずつちゃんとあたるようになってきたし、打った時の音もあまりでいていなかったのに、学習を重ねるごとに音かでるようになったことがうれしかったです。

また、ペアで行う自己の課題に応じた練習では、前時に行った班での振り返りや仲間からの評価、アドバイス、学習カードに記入した課題を意識し、工夫しながら積極的に練習に取り組むことで技能の変容【写真 28, 29】が見られるとともに、生徒の感想【資料 20】や生徒 B の学習カード【資料 21】においても、より具体的に課題を意識し【資料 21-①】、工夫しながら学習していくことで、技ができるようになったことを表す記述【資料 21-②】が見られた。そして、自己評価「課題を意識し、工夫して練習に取り組んだか」【グラフ 12】における段階毎のクラス平均の比較においても、つかむ段階の 2.49 から、振り返る段階では 2.64 という伸びを示した。

次に、基本となる技においては、基本打突からつながる段階的な指導として、小手を受けられた後に生じる隙をとらえる二段の技「小手、面」【写真 30】と、面を受けられて互いが接近した状態である「鑢ぜり合い」から繰り出す引き技「引き胴」、【写真 32】約束練習【写真 33】について学習させていった。新しい技を学習し、互いに協力しながら課題を解決していく活動の中で、生徒の思考・判断が高まり、仲間から認められ、技ができるようになるといった達成感を実感したことにより、意欲が高まっていったこと



【資料 21】生徒 B の学習カードの記述

〈8時間目の学習カード〉

【資料 21-①】

口仲間から聞いてもらったことやアドバイス（第一声がよく出ていた、もう少し左手の力を抜くといふ等）もと積極的に打ていよ。（自由練習）

○基本打突や引き技、連続技（小手、面、引き胴）、連続技（小手→面）の練習、成果（分かったこと）

【資料 21-②】

引き胴の送り足ができようになてきました。

●基本打突や引き技、連続技（小手、面）の練習の中で、課題（わからなかったことや難しくしかったこと）を記述し、どう工夫していきたいかを記述しよう。

連続技になると正しい打突部位にあまり当たらないので、正しい打突部位に当たる努力をする。

なかなか自分から積極的に打つことができなかったから、次はもっと力強く積極的に打ちたいです。

〈9時間目の学習カード〉

【資料 21-③】

口仲間から聞いてもらったことやアドバイス（第一声がよく出ていた、もう少し左手の力を抜くといふ等）もと積極的に打ていよ。（自由練習）

○基本打突や引き技、連続技（小手、面、引き胴）、連続技（小手→面）の練習、成果（分かったこと）

【資料 21-④】

小手→面が「出来てるね」と言ってもらえた。

連続技の小手→面のリズムが分かった。

つばぜり合いをしっかりとすることができなかった。

つばぜり合いが自分の中で上手にできなかったため、悔しかったです。

【資料 21-⑤】

連続技のリズムを意識しながら打ちました。

しっかりと目を見て、「お願いします」の気持ちを込めた。

正面打ち→つばぜり合い→引き胴のつばぜり合いを忘れずに正しい姿勢で行う!!

面を打つことができたのでうれしかったです。もっと積極的に打ちたいです。

が、形成的評価の推移【グラフ 13】や生徒 B の学習カードの記述【資料 21-③】からもうかがうことができる。これらのことから、支援教材を活用させながら、課題を把握し、運動の取り組み方を工夫していく活動を繰り返していくことで、思考・判断する力が高まった結果、技能や態度の高まりにつながっていったと考える。

②基本となる技の出来映え判定試合と支援教材について

基本となる技の出来映え判定試合【写真 34】では、新しい学習課題の「しかけ技」において、ペア対抗により、どちらのペアがより正しく「打つ」「打たせる」ことができているかを競い合わせていった。生徒は、個人技能チェックシートや相互評価シート【資料 17】における「気・剣・体、残心」の判定基準やこれまでの自分の課題を基に考え、ペアで互いに教え合い、協力しながらつくり合ってきた技を審判に評価してもらうことで、互いに高め合う喜びとともに、競い合う楽しさを実感し、技能や態度の高まりにつながっていったと考える。

このことは、【資料 22】生徒の授業後の感想からもうかがうことができる。

また、生徒 B の学習カードによる振り返りにおいて、基本となる技の出来映え判定試合から自己の課題を把握し、次時において意識し、工夫していこうとする記述【資料 21-④】が見られたことも、思考・判断する力を身に付け、技能を高めていこうとする姿の表れであると考えられる。

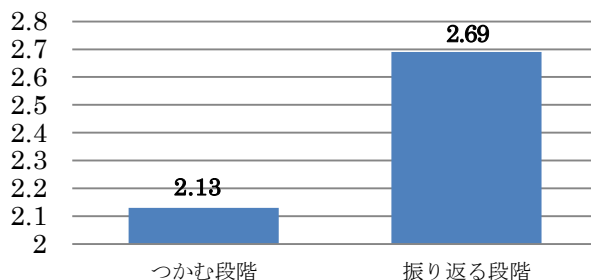
そして、試合の運営において、前回の判定試合を振り返りながら行っていたことで、以前よりも速やかな運営ができるようになったことや、判定においても、以前に比べ「気・剣・体、残心」といった項目を基に考え、自信をもって判定を行うことができるようになったことが生徒 E の記述【資料 23】や、「審判や記録係などの自己の役割を責任持って行うことができたか」のクラス平均の比較【グラフ 14】からも、思考・判断や態度が高まっていたことがうかがえる。しかし、ペア対抗であることから、判定のために見なければならぬ点が多くなったことや、短い時間で総合的に判断し、判定をしていかなければならないため、感覚でどちらが良かったかを判断することはできているが、それぞれの判定基準の項目に基づく勝敗の理由を十分に伝え合うまでには至っていなかった。【写真 35】

さらに、試合に関連させながら、全力で、真剣に試合を行うことが「相手を尊重する」ことにつながることや、勝敗が決まっても喜びや悔しさを態度の表さず、試合をしてくれた相手に感謝の気持ちを込めて礼を行うといったことについても考えさせていったことにより、態度の高まりにもつながっていったことが生徒 C の感想【資料 24】からもうかがうことができる。

【資料 22】「基本となる技の出来映え判定試合」の感想

「ペアの人と、どんな風にしたら、勝てるかを考えて、練習したり、する所や、協力でき、よかったです。それに、勝ったり、ほめられたら、とても嬉しくて、自信がわいた。」

【グラフ 14】「審判や記録係などの自己の役割を責任持って行うことができたか」のクラス平均の比較



【資料 23】生徒 E「基本となる技の出来映え判定試合」の感想

動きと声や残心などを見て自分意志で決めることができた。

【資料 24】生徒 C 礼をするときの気持ちについて記述

しかり、「お願いす。」ありがとうと言いたんと相手に対して感謝の気持ちを持ちあいさつしました。

③自由練習と支援教材について

自由練習においては、当初、仲間の前で緊張したり、恥ずかしがったりで思い切りできない生徒や、女子に対する遠慮から積極的に技を出すことができない男子生徒、自由に攻防し合うことに難しさを感じている生徒も見られたが、回数を重ねる毎に、これまでの学習を振り返り、生かしながら、身に付けた技を使い、楽しみながら自由に攻防を行うことができたことが、生徒の姿【写真 37, 38】や生徒 D の学習カードにおける記述の変容、【資料 25】生徒 B の学習カード【資料 21-⑤】、自由練習における感想内容（全体）の分析【グラフ 15】からもうかがえる。また、その中で生徒 D の学習カードの記述【資料 25】にもあるように、自己の課題に気付いたり、打突の機会を学ぶことや使える技を増やしていくこと、防御の技術を高めていくことの必要性においても感じたりすることで、更に剣道を学んでみたいという意欲の高まりへとつながっていったことをうかがうことができる。

そして、自由練習に関連させながら、全力で、真剣に攻防を行うことが「相手を尊重する」ことにつながることや、打っても打たれても、その喜びや悔しさを態度の表さずに最後まで礼法を守るといった「克己の心」について考えさせていったことにより、態度の高まりにもつながっていったことが、「克己の心」を学習しての生徒の感想【資料 19】や自己評価「礼法、所作を気持ちを入れて行うことができたか」における段階平均の比較【グラフ 16】からもうかがうことができる。

【資料 25】生徒 D の学習カード 自由練習（8時間目）の感想

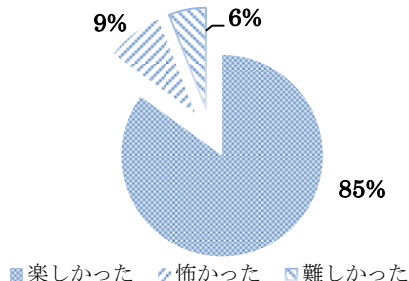
今まで習ったことはたくさんあるけれど、打つタイミングが見つけられなかったり、とっさに突いたりできません。打たれてばかりで難しかったです。



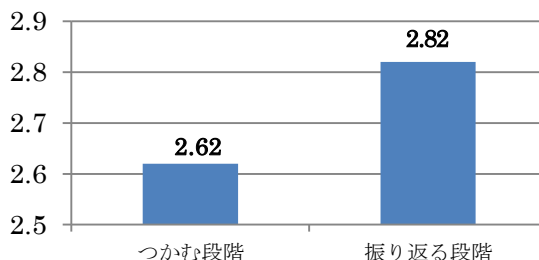
生徒 D の学習カード 自由練習（9時間目）の感想

まだまだ打たれてばかりなので、打ちかえせるようにがんばりたいです。自由練習は楽しいのでこれからも楽しんでやりたいです。

【グラフ 15】10時間目、自由練習の感想内容【全体】



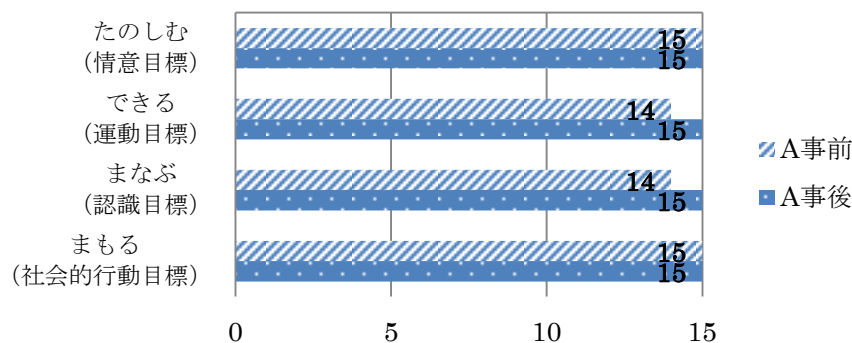
【グラフ 16】自己評価「礼法、所作を気持ちを入れて行うことができたか」段階平均の比較



5 事後調査

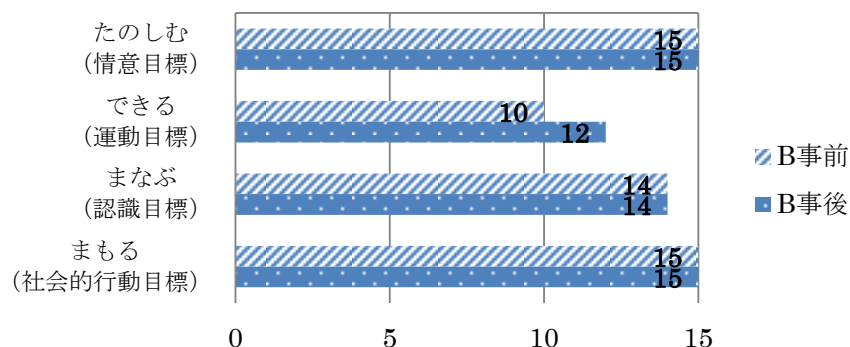
(1) 診断的授業評価と総括的授業評価の比較

【グラフ 17】A の診断的授業評価と総括的授業評価の比較



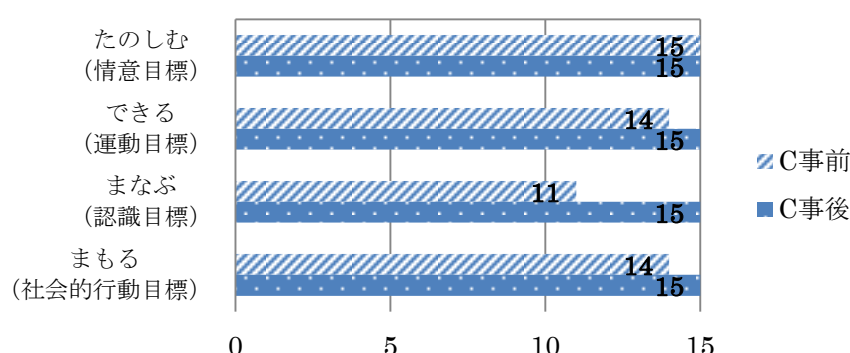
診断的授業評価においては、運動目標における「できる自信」と認識目標における「他人を参考」の項目において「どちらともいえないという」回答であったが、総括的授業評価では、2項目ともに上がり、すべての項目において15点の評価であった。

【グラフ18】Bの診断的授業評価と総括的授業評価の比較



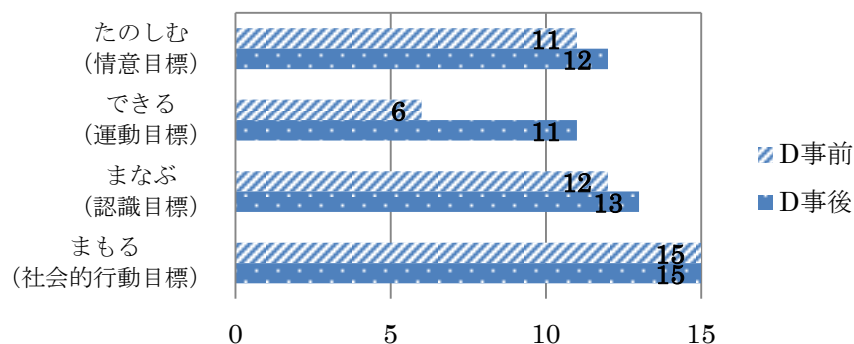
診断的授業評価においては、運動目標において10点(0)という評価であったが、総括的授業評価では、「できる自信」や「自発的運動」の項目が上がり、総合評価においても56点と高い数値を示した。

【グラフ19】Cの診断的授業評価と総括的授業評価の比較



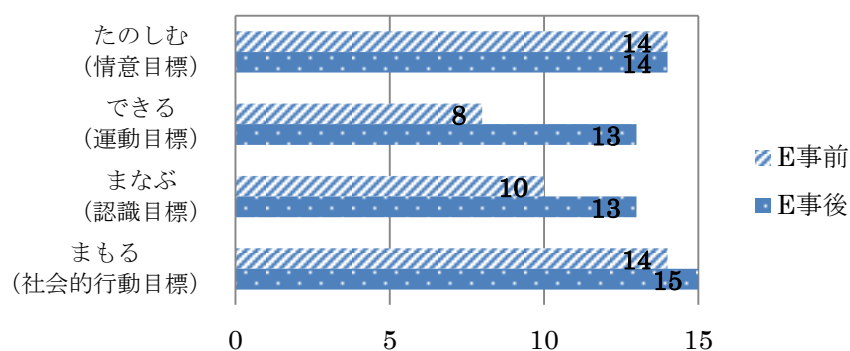
診断的授業評価においては、認識目標の数値が11点(0)であったが、総括的授業評価においては、認識目標「他人を参考」「応援」などの項目において上がり、すべての項目において15点という高い数値を示した。

【グラフ20】Dの診断的授業評価と総括的授業評価の比較



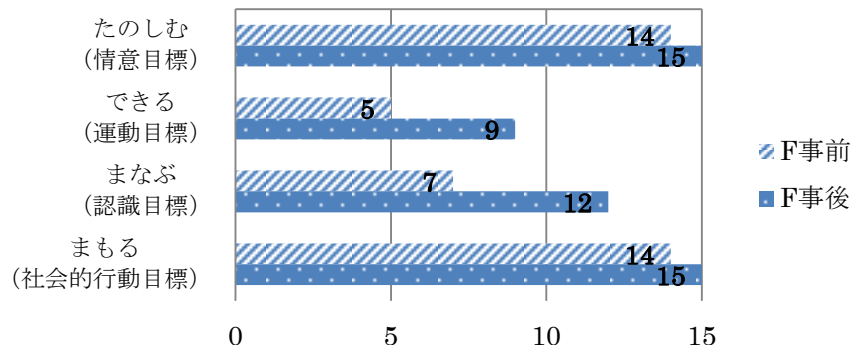
診断的授業評価においては、運動目標が6点(－)という低い評価であったが、総括的授業評価においては、11点(0)となり、顕著な伸びを示した。総合評価においても44点(0)から51点(+)と大きな伸びを示した。

【グラフ21】Eの診断的授業評価と総括的授業評価の比較



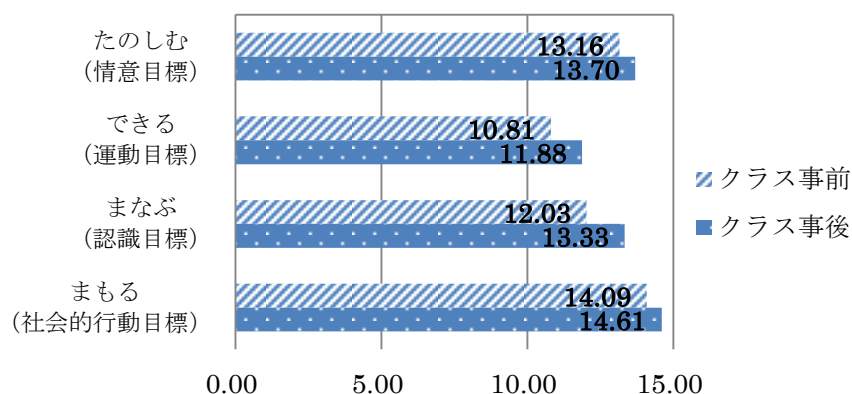
診断的授業評価において、「運動目標」が8点(－)という低い評価であったが、総括的授業評価においては、13点(+)と大きな伸びを示した。総合評価においても46点(0)から55点(+)と大幅な伸びを示した。

【グラフ22】Fの診断的授業評価と総括的授業評価の比較



診断的授業評価において、運動目標が5点（－）という低い評価であったが、総括的授業評価においては、9点（0）にまで伸びを示した。総合評価においても40点（－）から51点（＋）と大幅な伸びを示した。

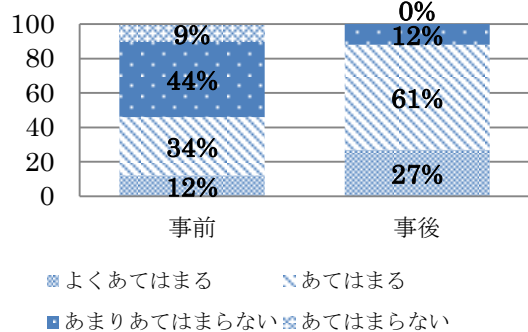
【グラフ23】クラス全体の診断的授業評価と総括的授業評価



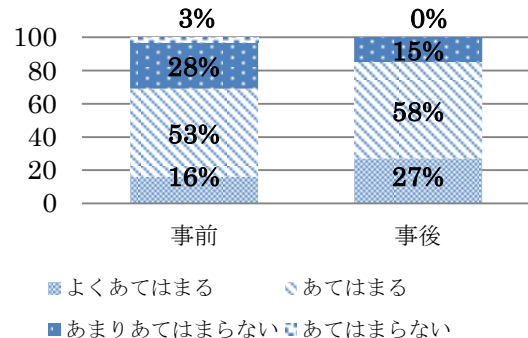
すべての項目において診断的授業評価よりも総括的授業評価の方が伸びを示した。特に運動目標においては10.81（0）から11.88（＋）、認識目標においては12.03（＋）から13.33（＋）と1点以上の伸びが見られた。

(2) 武道（剣道）に関する意識調査と体育の学習に関する意識調査

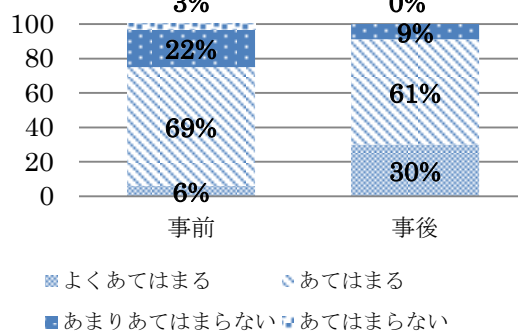
【グラフ24】仲間を見ていいところを伝えたり、アドバイスをしたりしていますか



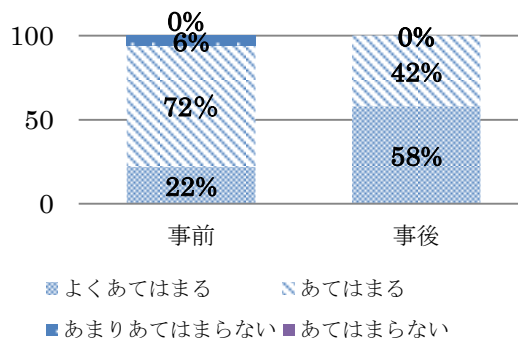
【グラフ26】気付いた課題を解決するために工夫して取り組んでいるか

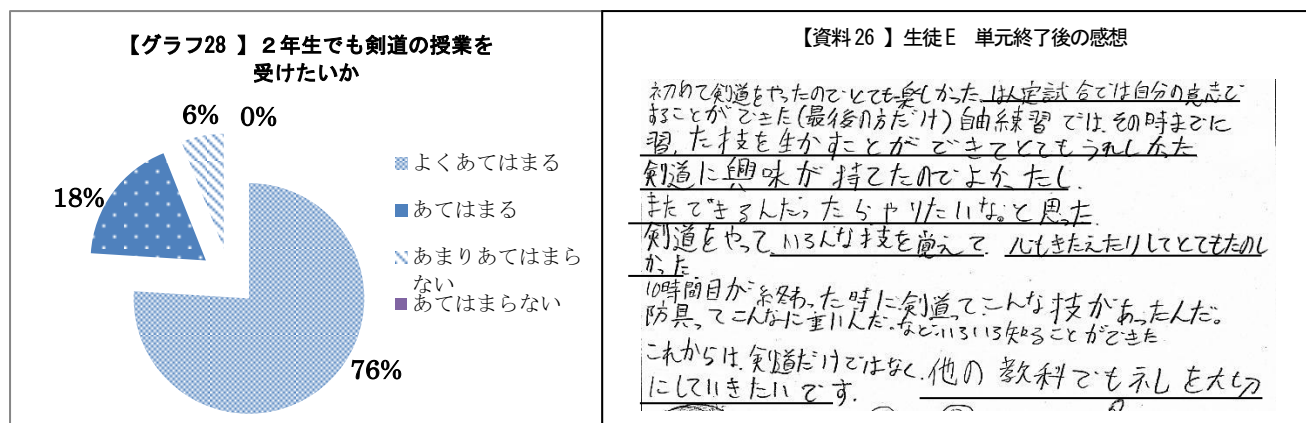


【グラフ25】前の時間に気付いた課題を意識して練習に取り組んでいるか



【グラフ27】体育の授業で気持ちを込めて礼をしているか



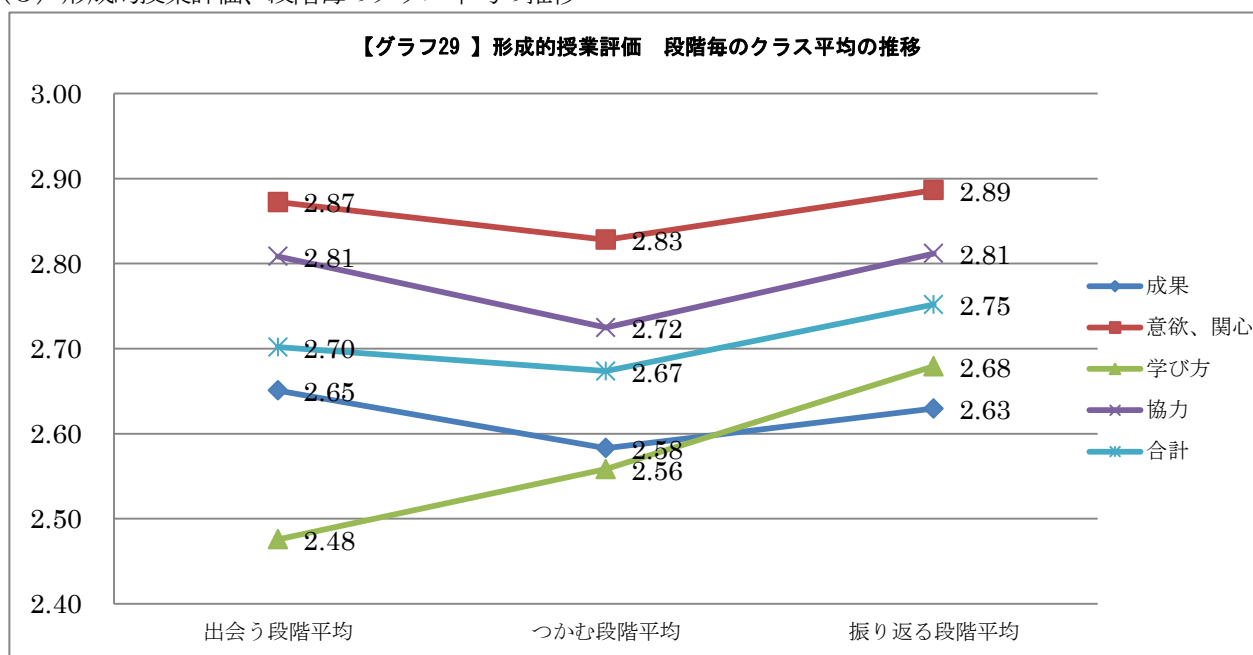


【グラフ24, 25, 26】から、「仲間とよさやアドバイスを伝え合っているか」「前の時間に気付いた課題を意識しているか」「気付いた課題を解決するために工夫しているか」のすべての項目において、事前調査よりも事後調査において「よくあてはまる」「あてはまる」と答えた生徒が増加していることがわかる。また、「体育の授業において気持ちを込めて礼をしているか」【グラフ27】の項目においても、すべての生徒が「よくあてはまる」「あてはまる」と答えた。そして、「2年生でも剣道の授業を受けたいか」【グラフ28】の項目においては、「よくあてはまる」「あてはまる」の合計が94%という高い数値を示した。

そして、生徒Eの単元終了後の感想【資料26】では、剣道の学習を通して技能や態度の高まりに喜びを感じ、更に剣道を学びたいといった意欲の高まりや、身に付けた態度を他の場面にも生かしていこうとする姿をうかがうことができる。

これらのことから、今回の検証授業の中で、互いによさやアドバイスを伝え合い、仲間と協力しながら、課題を解決していくために工夫して学習に取り組んでいく中で、技能や態度の高まりを実感し、剣道の授業における楽しさや喜びを味わうとともに剣道の持つ価値に気付くことで、継続して剣道の学習に取り組んでいこうとする愛好的態度が高まっていったことがうかがえる。

(3) 形成的授業評価、段階毎のクラス平均の推移



VII 全体考察

1 「技能」について

段階的な学習指導過程を仕組み、支援教材を活用させながら思考のプロセスを振り返る学習活動を設定していくことで、生徒は、相手の動きに応じた基本動作や基本となる技を習得し、それを生かして打ったり受けたりする攻防ができるようになるといった技能を高めていくことができたと考え

る。

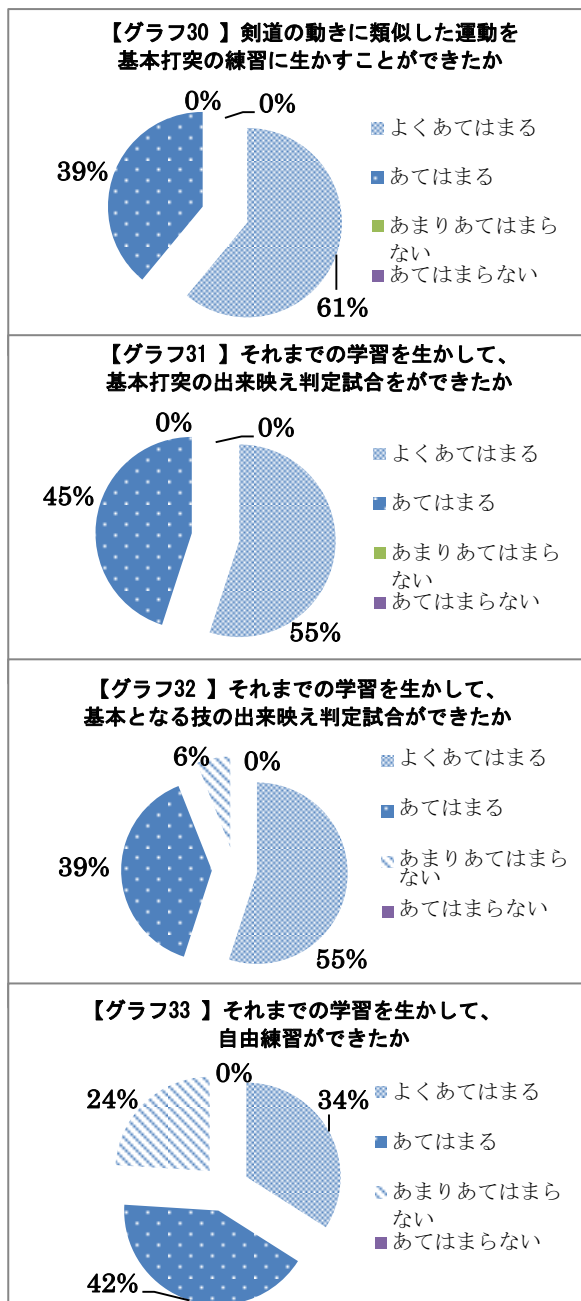
その根拠として、まず、授業後に行ったアンケートから、それぞれの思考のプロセスを振り返る学習活動において「それまでの学習を振り返り、生かすことができたか」【グラフ 30, 31, 32, 33】の項目に対して、「よくあてはまる」「あてはまる」の回答がすべての学習活動において大半を占めた。また、【グラフ 23】診断的授業評価と総括的授業評価におけるクラス平均の比較においても、「できる」といった運動目標における数値が 10.81 (0) から 11.88 (+) に上昇したことや、【グラフ 29】形成的授業評価における「成果」の項目が、段階的に発展させながら学習課題を設定していったにもかかわらず、その平均が高い段階で維持されていた。そして、【写真 25, 34, 37】のような生徒の変容が見られたことや、【資料 13, 20, 21, 22】のような学習カードの記述や感想が見られたことから、支援教材を活用させながら思考のプロセスを振り返る学習活動をそれぞれの段階において設定したことは、技能を高めていく上で有効であったと考える。

次に、単元終了後に行った調査「剣道の魅力（よさ、楽しさ、喜び）は、どんなところにあると思うか」という項目に対して「技ができるようになる」「攻防ができるようになる」といったことをあげている生徒が 33 名中、27 名（複数回答可）いることから、技能を身に付け、高めていくことに楽しさや喜びを感じ、剣道の魅力としてとらえることができた

と考える。

最後に、【資料 27】生徒 B の単元終了後の感想において、単元当初、剣道に対して不安を感じていた生徒が、仲間と協力しながら課題を解決していくことにより、できなかった技ができるようになったことに喜びを感じたことをうかがうことができる。

これらのことから、段階的な学習指導過程を仕組み、支援教材を活用させながら思考のプロセスを振り返る学習活動を通して、相手の動きに応じた基本動作や基本となる技を習得し、それを生かして打ったり受けたりする攻防ができるようになるといった技能を高めていくことができた



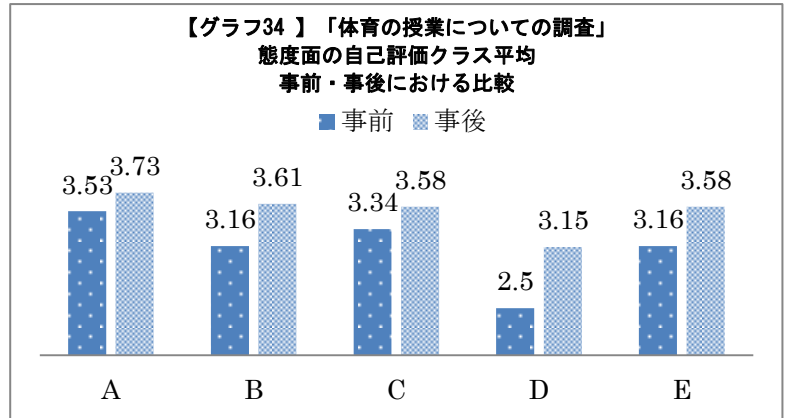
【資料 27】 生徒 B 単元終了後の感想

私は、最初の方の授業では、思うように竹刀で打突部位にきちんと打つことができてなくて、正直、「上手く打てるようになるのかな」という不安がありました。だけど、どんどん授業の回数を重ねていくうちに、友達や先生に、アドバイスをもらったり、たくさんの楽しい練習をしていくと、今までできなかった技ができるようになっていました。その時が、一番嬉しかったです。剣道は初めてで、難しかったけど、できるようになった時の喜びは、とてもいい物だなと感じました。

2 「態度」について

段階的な学習指導過程を仕組み、支援教材を活用させながら思考のプロセスを振り返る学習活動を設定していくことで、生徒は、伝統的な行動の仕方を守ろうとするとともに、課題を把握し、その解決に向けて仲間と協力しながら積極的に武道の学習に取り組んでいくといった態度を身に付けることができたと考ええる。

その根拠として、まず、【グラフ22】診断的授業評価と総括的授業評価の比較において、社会的行動目標の「まもる」における数値が14.09（＋）から14.61（＋）に上昇したことや【グラフ29】形成的授業評価における「協力」の項目について、平均2.78と高い数値で維持できたことがあげられる。また、【グラフ34】



A：「ルールやマナーを守ることができているか」

B：「準備や後片付け、審判記録などの自分の役割を果たすことができているか」

C：「自分の健康状態や練習場所・用具・行動の安全面に気を付けているか」

D：「仲間のいいところを伝えたり、アドバイスをしたりしているか」

E：「礼をする場面で、気持ちをこめて礼をしているか」

【資料28】生徒D 単元終了後の感想

技ができるようになったときは、ものすごく達成感があり、うれしかったです。仲間と一緒に協力することがあんなに楽しいものだと思います。でもいなかたので、協力することの楽しさや大切さを学ぶことができて良かったです。

できなかったことができるようになったときのおもしろさや相手がいることのありがたさも学ぶことができたので、今回の剣道は私にとって今まで知らなかった剣道の楽しさを知ることができるとも大切な時間だったと思います。



【資料29】生徒C 単元終了後の感想

剣道。授業を通じて、思う事は、「礼儀」の大切さです。

野球でも礼儀は大切ですが、最近「その礼儀」というのを忘れていました。

入学して初めての頃は、グラウンドに入るたびに「あいさつ」をしていました。でも最近「礼儀」がなくなり、毎日「あいさつ」していませんでした。しかし剣道の授業10時間、毎日「あいさつ」ができました。「なぜだろう」と考えた時、意識の問題だと僕は考えました。剣道は初めてのことでも、意識を集中させていると思います。でも毎日のようにグラウンドに入る際は意識せずに入ってしまったと思います。剣道場に入る時は「礼儀」は、いつでも必要不可欠だと思います。だから、これから毎日、グラウンドに入る時は「あいさつ」を「お願い」します。「あいさつ」ができていたと自分の精神の気持ちであいさつをしたいと思います。

次に、授業後に行った調査で「剣道の魅力（よさ、楽しさ、喜び）は、どんなところにあると思うか」という項目に対して「礼を大切にすること」「仲間と協力しながら技を高めてあつていくこと」「一生懸命に練習する中で、相手とともに自分も成長できること」といった態度に関することをあげている生徒が33名中、23名（複数回答可）いることから、態度を身に付け、高まっていたことを剣道の魅力としてとらえることができたことがうかがえる。

最後に、生徒Dの単元終了後の感想【資料28】において、仲間と協力しながら課題を解決し、技ができるようになった喜びを感じるとともに、「相手がいることのありがたさを学ぶことができた」という記述や、生徒Cの単元終了後の感想【資料29】において、剣道で学んだ礼儀の大切さを他の場面に当てはめて考えている記述からも、礼法・所作といった伝統的な行動の仕方や「相手を尊重する気持ち」、「克己の心」について学習することで、剣道のもつ価値に気付くことができた姿の表れであると考ええる。

これらのことから、段階的な学習指導過程を仕組み、支援教材を活用させながら思考のプロセスを振り返る学習活動を通して、生徒は、伝統的な行動の仕方を守ろうとするとともに、仲間と協力しながら積極的に武道の学習に取り組んでいくといった態度を身に付けることができたと考ええる。

3 「知識、思考・判断」について

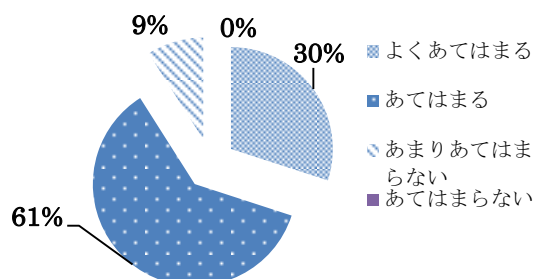
段階的な学習指導過程を仕組み、支援教材を活用させながら思考のプロセスを振り返る学習活動を設定していくことで、生徒は、学んだ知識を基に、課題に応じて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己の技能の高まりと仲間との協力や伝統的な考え方や行動の仕方といった態度について関連付けて考えていくことができたと考える。

その根拠として、まず、授業後に行った支援教材についてのアンケートからである。「学習カードは、気付いた課題（自分や仲間の）を把握し、工夫して練習するために役立ったか」「打ち方、打たせ方の個人技能チェックシートは、自分の課題を把握し、工夫して練習するために役立ったか」「相互評価シートは、自分の課題を把握し、工夫して練習するために役立ったか」【グラフ35, 36, 37】のすべての項目において、「よくあてはまる」「あてはまる」といった回答が多数の割合を占めたことがあげられる。また、各段階の考察でも述べているように、個人技能チェックシートや出来映え判定試合相互評価シートを活用し、【資料7, 11, 17】それを基に学習カードにおいて自己の動きを振り返り、【資料13, 21】のように、把握した自己の課題を意識し、考え、工夫しながら学習に取り組んでいくといった活動を繰り返しながら思考のプロセスを振り返る学習活動へとつなげていくことで、思考・判断の高まりとともに、技能や態度の高まりへとつながっていったと考える。

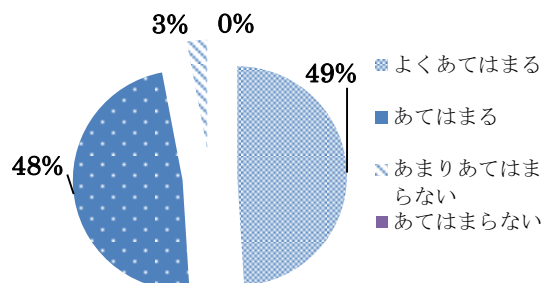
次に、生徒の単元終了後の感想【資料30】において、単元当初、恥ずかしがったり、遠慮しあったりしていたが、目を見て気持ちを合わせて礼を行うことで、気持ちが通うようになり、互いに遠慮しないで練習を行うことができるようになっていったことや、技能を高めるためには、互いの気持ちをわかり合い、相手を思いやる気持ちが大切であることに気付いたことがうかがえる。

これらのことから、段階的な学習指導過程を仕組み、支援教材を活用させながら思考のプロセスを振り返る学習活動を行うことを通して、生徒は、学んだ知識を基に、課題に応じて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己の技能の高まりと仲間との協力や伝統的な行動の仕方といった態度について関連付けて考えていくことができたと考える。

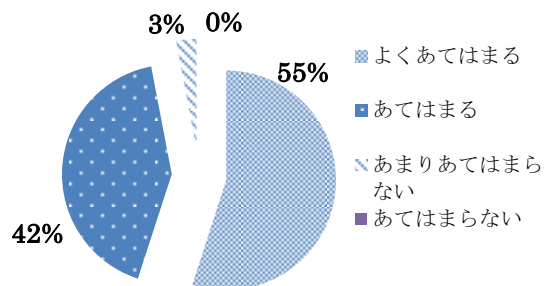
【グラフ35】「学習カードは、気付いた課題を把握し、工夫して練習するために役立ったか」



【グラフ36】「自己評価チェックシートは、自分の課題を把握し、工夫して練習するために役立ったか」



【グラフ37】「相互評価チェックシートは、自分の課題を把握し、工夫して練習するために役立ったか」



【資料30】生徒の単元終了後の感想

互いの人も打ちあいや自由稽古をやていくうち、技の深めあいとともに、仲の深めあいでもしたと思います。最初は「上手いとかいやかられるのがこわかったりしてみんな遠慮してました。でも、毎時間毎時間、目をみてえんて、お互いの気持ちを通わせることができて、仲を深めることができました。そして仲を深めることで技も出しやすくなり、遠慮のない本気の打ちをいっしょに出していけました。お互いがお互いの気持ちを分かりあうことが、剣道の基本中の基本なんだと再認識しました。私はこれから、日常でも剣道でも、相手の気持ちを考えて思いやる気持ちを大切にしていきたいです。そして、いつか、自分にあつた人になりたいです。

Ⅷ 研究のまとめ

1 成果

- (1) 3段階の学習指導過程を仕組み、段階のねらいに応じた学習内容を発展的に取り入れたことで、生徒は課題解決を図りながら、剣道の価値に気づき、技能や伝統的な行動の仕方といった態度を高めていくことができたと考ええる。
- (2) 思考のプロセスを振り返る学習活動を仕組み、支援教材を活用させ、これまで学んできた過程を振り返りながら学習させたことで、生徒は、技能と態度に関連した思考を繰り返しながら、剣道の魅力を味わうことができたと考ええる。

以上のことから、剣道において、「出会う」「つかむ」「振り返る」の段階的な学習指導過程の中で、思考のプロセスを振り返る学習活動を位置付け、支援教材を活用しながら、仲間とともに課題を解決していく活動の充実を図ったことで、個人の資質や能力が高まり、その結果、運動の魅力を探究していく生徒を育むことができたと考ええる。

2 課題

- (1) 生徒の課題解決のための活動時間をより確保することができるよう、短時間で効果的に行うことができる思考のプロセスを振り返るための支援教材を工夫していく必要がある。
- (2) さらに剣道の楽しさや喜びを味わわせるために、対人的技能や攻防の展開を発展させることに視点を当てた学習を究明するとともに、他の領域にも広げていきたいと考える。

【引用・参考文献】

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」

中央教育審議会2008

「中学校学習指導要領 保健体育編」

文部科学省2008

「文部科学白書」

文部科学省2008

「学校体育授業辞典」宇土正彦 監修

大修館書店1995

「現代教育方法辞典」日本教育方法学会 編

図書文化社2004

「中学校 新学習指導要領の展開 保健体育科編」今関豊一・品田龍吉 編

明治図書出版2008

「新版体育科教育学入門」高橋建夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖 編著

大修館書店2010

「保健体育科教育法」杉山重利・高橋健夫・園山和夫 編

大修館書店2009

「体育の授業を観察評価する」高橋建夫 編著

明和出版2003

「体育の教材を創る」岩田靖 著

大修館書店2012

「剣道授業の展開」

全日本剣道連盟2010

「新しい剣道の授業づくり」巽申直・恵土孝吉・本村清人 編著

大修館書店2004

「観点別学習状況の評価規準と判定基準〔中学校保健体育〕」北尾倫彦 監修

図書文化社2012

「剣道指導の手引 参考資料 新しい学習指導要領に基づく剣道指導に向けて」

文部科学省2010

「体育科教育2012 1月号」

大修館書店2012

「平成19・21・22・23年度 長期派遣研修報告書」

2008～2012

おわりに

福岡県の教育公務員として新規採用されてから10年を経過し、学級経営や部活動指導、生徒指導といった業務に自信を持って従事できるようになってきました。しかし、保健体育の授業研究においては、苦手意識があり、敬遠しがちになっていました。そんな中、福岡県体育研究所の長期派遣研修員として、1年間、研修の機会を与えていただきました。

体育研究所に来た当初、電話への対応や、各研修会の準備、運営補助、著名な講師の先生方への対応、国や県全体に関わる話など、あまりにも学校現場と違う中での業務内容や話の規模の大きさに、緊張し、戸惑うことばかりで、順応するまでに時間がかかったことが思い出されます。長期派遣研修員の会議においても、飛び交う専門用語や指導主事の先生方の話も理解できず、これまでの勉強不足を痛感させられるとともに、はたして1年間、やっていけるのだろうかと不安を感じながら、ただひたすら本を読みあさる日々が続きました。

そのような中、始まった研修ではありましたが、各専門研修や基本研修に参加させて頂き、それぞれの単元における授業づくりや、これからの体育の授業あり方などについて、講師の先生方や指導主事の先生方から貴重な話を聞くことができたことや、受講者の先生方と一緒に研修に参加することができたことなど、この体育研究所の研修でしか経験することのできないものを数多く学ばせていただき、この1年間で、少しずつではありましたが自分自身を成長させることができたように思います。

また、研究においては、本年度より完全実施となった中学校学習指導要領で、中学校1,2年生において武道が必修となったこともあり、武道の学習指導について取り組んできました。私自身、武道では「柔道」の指導経験はありましたが、専門競技として学んできたにも関わらず、「剣道」の学習指導の経験がなく、研究のテーマとする上で不安もありましたが、1年間の体育研究所での貴重な研修だからこそ、あえて「剣道」の内容に挑戦してみようと思い、研究を進めてきました。

研究を進めていくに当たり、研究テーマを決めることもままならず、理論構築や仮説の立て方、検証するためのデータのとり方、考察のまとめ方など、どれも初めての経験であり、思い悩むばかりで、なかなか形にならず、時間だけが過ぎ去っていく日々でありました。そんな中、在籍校に検証授業として訪れ、徐々に生徒達と触れ合い、授業や何気ない会話の中で見せてくれる笑顔に励まされるとともに、教師を志した原点を思い出し、この生徒達にもっと運動の楽しさや喜び、武道のよさを感じさせたいという思いを改めて強くすることができました。また、指導主事の先生方からの温かく、丁寧なご指導や、「ここで悩み、苦しみ、考えていることだけでも意味がある」といった励ましの言葉を頂いたおかげで、まだまだ稚拙ではありますが、研究を形として残すことができたことに深く感謝致しております。そして、同じ長期派遣研修員として共に苦しみや喜びを共有しながら、1年間を共に過ごしてきた2人の先生方との出会いにも感謝するとともに、この絆は切れることなく一生続いていくものと思われまふ。この1年間で学んだことや出会いを糧に、今後も研修に励みながら、生徒と共に頑張っていきたいと思ひます。

最後になりましたが、この貴重な研修の機会を与えていただきました福岡県教育委員会、北筑後教育事務所、久留米市教育委員会に厚く御礼申し上げます。また、本研究を進めるにあたり、温かいご指導を頂きました教育庁体育スポーツ健康課、義務教育課、体育研究所の方々に深く感謝申し上げます。さらに、検証授業にあたって御協力頂きました久留米市立北野中学校の平田校長先生、大熊教頭先生をはじめ、学級担任の先生方や保健体育科の先生方、1年部の先生方、そして、1年2組の生徒の皆様に心より御礼申し上げます。

今後とも、より一層のご指導、ご鞭撻を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

平成25年2月14日

長期派遣研修員 須田 新之介 (久留米市立北野中学校)